附属学校国際教育推進委員会報告書（第８集）

～2016年度～

附属学校群の国際教育の推進







2017年3月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目　次

1．はじめに

グローバル素養育成のカリキュラム開発の第一歩

筑波大学副学長・附属学校教育局教育長　宮本信也 …… 3

附属学校群の国際教育の推進

附属学校国際教育推進委員会委員長

筑波大学教育局教授・附属視覚特別支援学校長　澤田　晋 …… 4

2．附属学校の国際教育 …… 6

3．共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 …… 8

4．各附属学校の国際教育活動

⑴　児童交流と教員の国際交流を柱にしたグローバル教育

（附属小学校）…… 12

⑵　2016 年度国際教育事業について

（附属中学校）…… 15

⑶　グローバル人材の育成を目指して

（附属高等学校）…… 21

⑷　2016 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外での活躍

（附属駒場中・高等学校）…… 29

⑸　国内外の人々が集い学びあうオープンプラットホームスクールを目指して 2

（附属坂戸高等学校）…… 33

⑹　トビタテ！留学 JAPAN　チェコ共和国での留学経験から世界で活躍するリーダーへ

（附属視覚特別支援学校）…… 37

⑺　聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

（附属聴覚特別支援学校）…… 45

⑻　附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告

（附属大塚特別支援学校）…… 51

⑼　積極的にコミュニケーションを図る態度と、自己発信力を育む桐が丘

（附属桐が丘特別支援学校）…… 59

⑽　附属久里浜特別支援学校の国際交流　～中国の姉妹校との交流を通して～

（附属久里浜特別支援学校）…… 65

⑾　ＪＩＣＡ研修「障害のある子どものための授業づくり」を終えて

（特別支援教育研究センター）…… 69

５．各附属学校のイングリッシュルーム活動
⑴　留学生との交流
（附属小学校）…… 72
⑵　附属中学校 イングリッシュルームの活用報告
（附属中学校）…… 73
⑶　附属高校のイングリッシュルーム活動について
（附属高等学校）…… 74
⑷　Englsh Room : 海外研究発表とその先への支援
（附属駒場中・高等学校）…… 75
⑸　楽しい英語活動と SGH 校としての活動の両立を目指して 2016-2017
（附属坂戸高等学校）…… 76
⑹　附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属視覚特別支援学校）…… 77
⑺　イングリッシュルーム活動
（附属聴覚特別支援学校）…… 82
⑻　児童生徒の積極性を引き出すイングリッシュルーム
（附属桐が丘特別支援学校）…… 83
６．おわりに
まとめに代えて
（附属学校国際教育推進委員会副委員長　今井　二郎）…… 85
（資料）附属学校の国際交流協定締結状況 …… 86
報告書発行の記録 …… 90
委員会名簿 …… 91

1. はじめに
グローバル素養育成のカリキュラム開発の第一歩

副学長・理事、附属学校教育局教育長　宮　本　信　也

平成 28 年度は、国立大学法人の第３期中期目標・中期計画の開始の年度である。中期目標は第３期の期間６年間で達成する目標であり、中期計画はその中期目標を達成するための具体的な活動計画である。筑波大学の第３期中期目標・中期計画の中で、附属学校に特化したものとして、中期目標が２つ、その下の中期計画が３つ設定されている。また、大学全体の中期目標『世界的な人材育成拠点体制の確立』の下に附属学校に関連する中期計画が１つ設定されている。附属学校群に関するこれら中期目標・中期計画の内容は、大きく分けて、グローバル人材育成、インクルーシブ教育展開、附属学校群改革とまとめることができる。しかも、４つの中期計画のうち３つは、グローバル人材育成と関連する内容が書かれている。このことは、今年度から６年間、附属学校群は、その主な活動の最も大きなものの一つとして、グローバル人材の育成に係る活動を行っていくことが求められていることを意味しているといえるであろう。「求められている」としたが、中期計画とは、各組織が自分たちで定めたものであり、「行っていかなければならない」ものであると認識する必要があるであろう。

中期計画には、中期計画が順調に進んだことを評価できるような具体的な目安となる重要業績評価指標（KPI、Key Performance Indicator）を設定することが推奨されている。KPI は、時期と達成目標をできるだけ数字で示すことが求められる。附属学校群が行うグローバル人材育成に関する中期計画においては、『平成 30 年度までにグローバルな素養を育てるカリキュラムを開発』と『SGH 対象校において、平成 33 年度までに海外での武者修行経験者を SGH 対象生徒の 80％以上に』の２つの KPI が掲げられている。私たちは、これらの KPI 達成を意識しながら、グローバル人材育成のための教育研究活動を行っていくことになるのである。

２つの KPI を念頭に置いた活動は並行して行われるものの、現時点では、達成年度が早い方を意識した活動計画を先ず考えることが要求される。それは、『平成 30 年度までのグローバル素養育成カリキュラム開発』である。そこで、附属学校教育局では、今年度、この KPI 達成に向けての作業工程表の作成に取り組んだ。具体的な活動内容の全てを盛り込んだ工程表の完成は次年度に架かることになったが、いずれにしても、私たちは、グローバルな素養を育てるカリキュラム開発のための第一歩を今年度踏み出したといえるであろう。

ところで、グローバルな素養とはどのようなものであろう。グローバル人材育成推進会議（2012）は、「要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体感・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ:異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」をグローバル人材に求められる要素としてあげている。語学力や異文化を理解するための知識は、学校内で教え高められるものであろう。一方、それ以外の要素は、いずれも知識とスキルの教授だけで身につくものではないように思われる。学習のみならず、学校行事活動、部活動、及びその他の集団活動など、こうした毎日の生活の中で児童生徒が行う全ての活動がグローバルな素養につながるものと考えられる。

グローバルな素養を育てるカリキュラムの開発は、これから何か特別の新しいものを考え出すというよりは、附属学校群がこれまでに行ってきた日々の取り組みを、グローバルな視点から整理し直すことで達成できるのではないだろうか。私たちは、すでに何歩も歩んできているのかもしれない。この報告書にその足跡を多数見いだすことができるであろう。附属学校群における国際教育推進の実績の積み重ねが、期待されるカリキュラムの形になることを願いたい。

附属学校群の国際教育の推進

国際教育推進委員会委員長
筑波大学附属視覚特別支援学校長　澤　田　　晋

筑波大学附属学校群及び特別支援教育研究センターの先生方が、本年度４回の委員会において、報告・協議・学習会を重ね、また今年度各学校等の活動がどのように展開されたかをご執筆いただき、附属学校国際教育推進委員会報告書（第８集）の発行に至りました。先生方には詳細な報告をありがとうございました。また、ご指導いただきました関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。「附属学校の国際教育拠点活動の新たな展開」のタイトルを設定して、各附属学校が国際教育の推進計画を立案し、実践を深め、幼児・児童・生徒の成長と変容を明らかにし、次年度に向けて課題と改善策を整理して、よりよい国際教育の在り方を附属学校群として検討しました。

平成 28 年度附属学校研究発表会において、「グローバル教育」として、附属小学校と附属聴覚特別支援学校から研究発表が行われました。第４回の国際教育推進委員会においても、学習会や各学校の活動報告において発表・報告がありましたが、より詳細な研究発表がありました。附属小学校からは、留学生との交流会と、希望者が参加する日米児童交流会についての発表があり、自然なコミュニケーションと、心から楽しみながらの活動により、異文化理解が進んでいることが発表と映像を通して明確にされました。先生方の教材研究と、ほぼ全員の先生方の海外での授業や研究会への参加、国際支援等、全員体制により国際交流体験を積み重ねていることが児童の成長を支えています。附属聴覚特別支援学校専攻科では、国際交流事業として専攻科生徒の台湾研修旅行が行われています。研究発表では、事前学習等実践を深めるための取り組みとともに、生徒の変容を「国際的資質を問うアンケート」により数値化・グラフ化しています。異文化理解等生徒の変容をより客観性を担保して明確にするための重要な手法となっています。

筑波大学附属学校の国際教育のコンセプトの第一は、「幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う」です。第二は、「教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える」にあります。

第一に、「幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う」ということに関してですが。グローバル化が一層進展する社会で生きていくためには、国境を越える地球全体の視点からの文化理解と、多様な文化をもつ人々と共に生きる力を、幼児・児童・生徒それぞれの発達段階に応じて育成していく必要があります。そのためには、異文化の人々とのコミュニケーションが重要となります。それは英語を話すことができるというだけではなく、異文化を受け入れる心と心の触れ合いに裏打ちされたコミュニケーションが重要となります。東京オリンピック・パラリンピックには世界中から大勢の人々が来訪されます。異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国人との接し方、国際的視野で物事を捉える姿勢、語学力・コミュニケーション能力の育成等、国際化対応能力を培う教育の推進は喫緊の課題となっています。

第二に、「教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える」ためには、教職員間の国際教育推進についての共通理解が必要です。教職員相互の理解を共通理解に高め、学校組織としての国際教育の推進が重要となります。

筑波大学附属学校群は我が国のみならず世界の初等中等教育、特別支援教育のリーダーとして高度の専門性ある教育を展開しています。また卒業生は各方面で、トップリーダーとして活躍しています。世界各地で活躍する人材、国際貢献を果たす人材を育成し、各国が抱える課題解決に貢献していくことが国際教育の拠点としての附属学校の使命です。各附属学校の協力を得て委員会で作成した附

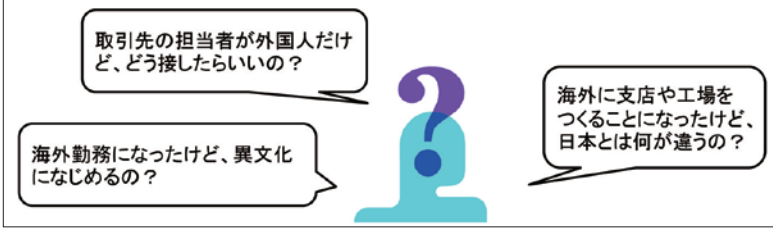
属学校群の国際教育推進地図を俯瞰して、附属学校群が国際教育を推進し、特色ある活動を展開して国際貢献を果たしていること実感します。附属学校国際教育推進委員会報告書にはこのことが明確に述べられています。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきている。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。



グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティー

国際社会における筑波大学の使命

●21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は，
(1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
(2)国際的リーダーとなる人材の輩出
(3)国際的な連携の構築
であると考える。

●筑波大学は，急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで，世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために，未来を切り拓く知の創造を通じて，地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかかげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

●幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
●教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児児童生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニ 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考				
各校の国際教育の目標 （国際教育を通じて育成する生徒像）						各校の特色を生かし ・総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。
		・小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。			・トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。	
（国際教育を通じて広がる教師力）		・諸外国の児童生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色（長・短を含む）を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業、生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・海外との交流を通じて教師の語学力のみならず、異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
（国際貢献）		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の生徒との相互研究発表により、学問的に切磋琢磨される。それに付随する文化的な交流が、相互理解を一層深める。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組（28年度）	幼児児童生徒	・３年生からのALTを活用した英語活動。 ・DCバークレー大学，サンフランシスコ市内小学校との児童交流。 ・多目的教室「未来の教室」を活用した国際教育。 ・留学生との交流。 ・外国の生活等，身近な題材を通じた異文化理解。 ・韓国との定期的な授業交流会。 ・日米韓による詩の交流会。 ・イングリッシュルームの時間の実施	・アメリカ、シンガポールへの短期留学 ・日米韓ポエトリープログラムで、韓国に行き、詩の発表を行う機会を持った。 ・ＡＰＥＣを通じて、タイの中学校とビデオで結び、同じ教材を同時に、空間を超えて学び合う体験を持った。 ・数々の海外からの視察を迎え、質問に応答したり、授業に加わってもらったりする機会を持った。 ・総合学習の中で、日本のスポーツについて、海外の方に英語で説明を行う機会があった。 ・イングリッシュルーム活動の実施。	・G7ジュニアサミット高校生の受け入れ。 ・シンガポールのホワチョン校（HCI）が主催するアジア太平洋リーダーズサミットへの生徒派遣。 ・HCIとの相互短期留学。 ・カナダプリンスエドワード島大学研修 ・筑波UBC研修 ・中国の高校との相互交流。 ・韓国HANA高校での国際学術シンポジウムに参加。 ・オリンピック教育を通した国際理解・平和教育 ・第二外国語（独語・仏語・中国語）の実施。 ・筑波大学外国人留学生による講義。 ・海外留学・海外勤務を経験した卒業生等による講演。 ・EUセミナーの開催 ・様々な分野の国際セミナー・コンクール等への参加。 ・海外留学単位認定制度を活かした１年間（以上）の海外留学（1988～）。 ・海外帰国生徒の受入（1978～）。 ・ジャパン・リターン・プログラムによる海外留学生の受入。 ・シンガポールへの修学旅行。 ・イングリッシュルーム活動の実施。	・台湾台中第一高級中学での生徒研究交流会。 ・韓国釜山国際高等学校との文化研究交流。 ・コアSSH校との提携による、生徒の海外派遣（北京・米国）。 ・タイ・サイエンスフェア参加 ・各種国際科学コンクール（オリンピック）参加。 ・筑波大学外国人教員研修留学生との交流（音楽祭・文化祭）。 ・海外からの訪問団との交流（タイ）。 ・総合学習での外国人研究者による授業（サイエンス・ダイアログ）。 ・外国人講師による英語の授業及びプレゼンテーション能力の育成。 ・イングリッシュルーム活動の実施。	・姉妹校（ボゴール農科大学附属コルニタ高校およびインドネシア林業省林業教育センター附属高校）との交流および協働学習。 ・第２回全国ＳＧＨ校生徒成果発表会を開催。他のＳＧＨ校と研究成果を共有。 ・高校生国際ESDシンポジウム@東京2016の開催およびインドネシア、タイ、フィリピンの各校との交流。 ・フィリピン大学附属ルーラル高校との国際交流協定の締結。 ・留学の促進、留学生の積極的な受入れ。 ・国際的視野に立った卒業研究の支援プログラムの実施。 ・教科「国際」の実践。 ・カナダ校外学習の実施と内容の精選・充実（2017年３月） ・第６回サイエンスインカレに本校生徒が参加し発表。 ・インドネシア姉妹校への１年間の留学 ・筑波大学AIMSプロジェクトとの連携 ・英検２級、準１級合格者の増加。 ・イングリッシュルーム活動の実施。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
ケーションをとる態度を養う。 える。				
た国際教育の取組				
・国際交流等により国際性を身に付けた人材の輩出。	・国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。 また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心を持つ人材を育成する。	・外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 ・外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。 ・自国の文化、習慣を大切にする。	・国際交流の経験を基に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童生徒の育成。	・子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技能を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
(小学部) ・5・6年生と専攻科留学生との交流学習会。 ・津田塾大学留学生との交流。 (高等部) ・平成28年度「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム（高校生コース)」に普通科2年生2名が採用。(4週間、チェコ共和国リベレツ特別支援学校、リベレツ工科大学等) ・「海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちは」高等部生2名（5日間、タイ・チェンマイ盲学校） ・ペルー調査・研究のため、ペルー大使館訪問、ペルー人筑波大学院生との交流。 ・2年生、JICA筑波委託事業「障がいのある子どもたちのための授業づくり」、見学者との合同授業 ・Hands On Tokyoとの定期的英会話交流会。 ・フィリピン障害者支援事業プロジェクトマネージャーをする本校卒業生を招いての講演・学習会。 (専攻科) ・鍼灸手技療法科に各学年2名の留学生枠を設置。 ・ミャンマーとの交流と支援、鍼灸科在籍留学生が帰国訪問し情報交換。 ・イングリッシュルーム活動の実施（幼稚部・小学部・中学部・高等部)。	・オンラインで国立ソウル聾学校中学部生徒と中学部生徒が交流。 ・オンラインで高等部普通科生徒がパリ聾学校生徒と交流。 ・オンラインで専攻科造形芸術科、ビジネス情報科の生徒が臺南大學附属啟聰學校生徒とオンライン交流。また、國立臺南大學附屬啟聰學校、臺北市立啟聰學校の2校へ訪問交流を行った。 ・イングリッシュルームの時間の実施	・全校集会における外国語（英語）活動の紹介と実践。 ・IOC委員、TIAS関係者の視察とアダプテッドスポーツを通した交流活動。(オリパラに関連) ・学部に応じた国際教育の実践 (小学部：世界の遊び、ブラジル伝統菓子の調理。中学部：調べ学習－体験をもとにした国際教育を題材とした授業、ALTによる授業。高等部：調べ学習及び筑波大学ランデーブラクワール先生、TIAS留学生との交流活動)	・韓国セロム学校に代表児童生徒各1名を派遣し交流。帰国後、交流報告会を実施。 ・台湾国立和美実験学校、同南投特殊教育学校に代表生徒2名を派遣し交流。両校と国際交流協定を締結。帰国後、交流報告会を実施。 ・高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生（7か国8名）との交流。 ・小学部5・6年児童とJICAオセアニア・アフリカ研修員（8か国11名）との交流。 ・「1学級1国運動」の実施。 ・イングリッシュルームの開設。	・海外からのお客様との交流。 (ＪＩＣＡ筑波によるアフリカ研修生、インドネシアの教育行政関係職員の視察等)

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組（28年度）	教師国際貢献含	・韓国との相互訪問における授業交流・姉妹提携 ・サンフランシスコ日米授業交流 ・ウガンダ教員参考書作成支援 ・海外での授業公開。 ・デンマークコペンハーゲン・スウェーデンにおける授業交流 ・タイコンケン大学の要請による授業交流 ・JICA 研修員の受入。	・教員は生徒の海外引率の際、他の国の学校事情について学び、また、日本の事情を発信して、互いの情報交換を行った。 ・本校の学校紹介ビデオと、ホスト校のアルバムを交換し、交流を深めた。	・教員の英語研修。 ・教員の海外派遣。 ・海外からの教育視察の受入。 ・校内研究会で国際交流事業について研修。 ・スポーツを通した国際交流。	・生徒の海外派遣に伴う引率や現地での教員プログラム参加（タイなど）。 ・ユネスコスクール全国大会への派遣。 ・海外からの教員視察（中国・タイ・フィンランド・クロアチア）対応。	・教員の海外派遣（海外の会合での発表を含む）。 ・諸学会での国際教育に関する発表。 ・海外からの教員視察の受入。 ・フィリピン大学附属ルーラル高等学校と国際交流協定を締結。
環境整備	現状	・多目的教室「未来の教室」の設置。	・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。	・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。	・スカイプなど利用して海外派遣先の生徒と校内生徒との交流（数回実験済）。	・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		・英語専科教員の増員（小学１年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。	・ＡＬＴとのティームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。	・ウェッブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。	・海外派遣で交流の確立している相手校とテレビ会議等での交流を定期的に行う。	・ＡＬＴの常駐。 ・校内Ｗｉｆｉの整備を行い、日常的に海外の学校と学びあえるようにする。 ・アセアンを中心にアジアの高校生向けの奨学金制度を創設し、坂戸高校で日本語学習を実施し、筑波大学に入学できるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
・教員の海外派遣（タイ、ミャンマー等）。 ・バングラデシュパブテスト宣教統合学校（バングラデシュ唯一の女子盲学校）モモタ・パイレジー校長来校 ・マレーシアの盲学校からWann Diyana　氏、授業見学。 ・タイ視覚障害児の理数科基礎教育に関する教員の資質向上支援プロジェクト。	・国立パリ聾学校での本校校長・主幹教諭の授業実施等、文化交流授業（美術・水墨画）を行った。 ・附属聴覚の９名の教員と東京都の公立聾学校教員４名が日本代表団として、ロシアのニジニ・ノヴォゴロド市の聾学校、ピアノ劇場を視察訪問した。	・JICA 研修の受け入れ、授業視察、教材紹介等（アフリカ、大洋州より 11 名）。 ・JICA インクルーシブ教育システム啓発映像の撮影協力。 ・諸外国より研修及び視察の受け入れ（香港、韓国、ラオス、フランス、インドネシア）。	・韓国セロム学校教員との情報交換。 ・台湾国立和美実験学校、同南投特殊教育学校教員との情報交換。 ・外国人研修員の受入（JICA オセアニア、アフリカ研修員、インドネシア大学教員）。 ・ベトナムの特別支援教育関係者の研修支援。 ・ノルウェーの特別支援教育関係者との情報交換	・中国蘇州工業園区仁愛学校との姉妹校交流として、スカイプを利用した授業研究会を年２回実施。 ・筑波大学教育研究科の外国人教員研修留学生の視察
・スカイプ。	・筑波大学内のウェブ会議システム。	・スカイプを活用した実践。 ・教材・教具の展示	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議のシステム。 ・新設する図書館に海外絵本コーナーを設置。
・校内各所からの国際電話。 ・留学生支援の充実。	・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のパリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11 附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。	・継続的な教員の海外派遣交流視察、研修の機会の設定。	・ウェブ会議システムの活用。 ・外国語の絵本、日本の漫画の英訳本など、身近な題材を通じて外国語に親しむ環境を整える。 ・北欧等の特別支援学校との児童生徒間交流、教員間交流。	・海外からの講師招聘型研修会を恒例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

児童交流と教員の国際交流を柱にしたグローバル教育

１．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校では、グローバル人材育成の一歩として、児童が体験を通して学ぶことを重視し、大学の協力を得て留学生との交流会と希望者が参加する日米児童交流会を実施している。週１時間で培うことのできる英語力は限られているが、交流会を通して、自らコミュニケーションを図る大切さ、異文化理解を深めるきっかけとして重要な活動と位置づけている。

実践のねらいは主に２つである。

・英語を使ったコミュニケーション場面を想定し、児童が定型表現などを使いながら英語に慣れ親しむこと

・サンフランシスコで触れ合う現地児童や様々な国・地域から来ている留学生との交流を通して、言葉の壁を越えて関わり合うことの楽しさを実感し、異文化に対する理解を深めること

さらに、附属小学校教員も全員体制で、国際交流の体験を積み重ねている。ここ数年で、ほぼ全員が海外での授業や研究会への参加、国際支援に取り組んできた。まず、教員全体の意識が高まらなければ、グローバル化への取り組みは成功しないと考えている。

２．交流の実際　児童の交流②

サンフランシスコで行う日米児童交流会

５年生になる前の春休みに、参加希望児童 23 名がサンフランシスコにて日米児童交流会に参加した。現地校の小学生との交流を始め、カリフォルニアバークレー州立大学のキャンパスツアーやスタンフォード大学見学など行い、日本を出ての交流体験を試みている。この活動は４年目を迎える。

昨年度交流先：Mills College Children's School（１日）

：Sandpiper Elementary School（２日）

活動例：Get to know Activity

P.E. boot camp

Math project/ Math game

Science class

Lunch

交流先の学校では実際に授業を受けて活動に参加したり、あるいは附属小の先生が現地の児童たちを含め英語で授業を行ったりするなど、貴重な体験を重ねることができた。やはり、英語力の課題がみられるが、児童同士で休み時間一緒に遊んだりするなど、言葉の壁を超えてコミュニケーションを図ることのできた児童も多くみられた。

参加した児童からは、実際に授業を受けてみて刺激をうけることができた、難しかったが分かるところをつないで何とか頑張ったといった声が寄せられる。また、コミュニケーションをもっとスムーズにとれるようにと英語の学習に意欲的な傾向も見られ、自分で体験することの意義を再認識していた。最初は費用負担に対しての効果に疑問をもつ保護者もいたが、参加後は児童たちの様子を見て、本当に参加して良かったというアンケート結果が得られた。

この活動をきっかけにして、次の年に単身アメリカ留学を決めて参加した児童、英語の本を通学時に読む児童もみられる。




3．交流の実際　教師①　日韓交流授業





10 月 8 日～ 12 日まで、京畿道水原市、谷城群、光州広域市の各初等学校を訪問して、現地の児童を相手に授業を行った。本年度は、森田、辻（理科）、笠（図工）、梅澤（社会）が授業を行った。さらに現地の先生も音楽の授業を行い、参加された先生方と協議会も行った。

1 月 16 日～ 18 日まで、秋に訪れた地域の先生方が、韓国から参観をするために訪日をされた。双方の国を訪れる交流は第 9 回目を迎える。これまでに、国語や道徳も含め交流授業を行い、来年度予定している家庭科の授業で、全ての教科が授業を行うことになる。

4．交流の実際　教師②　デンマーク、フィンランド交流




10 月 11 日から 15 日まで、コペンハーゲン大学研究協力校（ホムタフトスコールン）で算数の授業を行う。午前中に夏坂の授業と協議会、山本、大野、中田によるワークショップを行った。午後は

盛山が授業を行い、現地の先生方も交えて、授業協議会を行った。活発な意見交換の後、コペンハーゲン大学カール教授とヤコブ研究員が、現地の先生方に今回の研修会の意義を説明し、次年度も是非もうけたいという依頼を受けた。

来年度は、算数だけではなく、理科、音楽にも幅を広げて開催する依頼を受け、航空券もすでに購入して、来秋の渡欧を予定している。

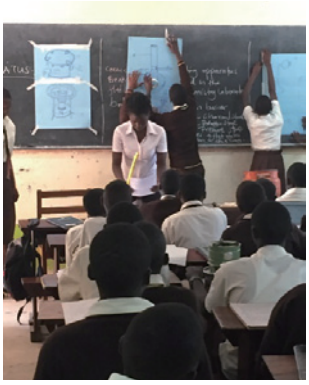
５．交流の実際　教師③　タイコンケン大学の要請





11 月に数日の強行スケジュールで、タイで粕谷（社会）、眞榮里（体育）が授業を行った。授業法を学びたいという、タイコンケン大学の要請を受けての活動である。授業を行い、それを基にして、授業法の説明も行った。

６．交流の実際　教師④　アフリカのウガンダ教育支援







４年計画の３年目になる。作成した授業カリキュラムで授業をしてもらったり、講演を行ったりして、ウガンダの中等教育の教育指導書作りの支援を行っている。鷲見、佐々木（理科）、盛山、中田、大野（算数）が長期休みを利用して行っている。

７．交流の実際　授業公開

年間数百人にのぼる海外の方の受け入れを行い、授業公開、授業後の講演を行っている。米国、英国、インドネシア、タイ、シンガポール等、多くの国からの参観がある。

授業後の話し合いで、言語や文化は違っても、指導法や教材研究で抱えている共通の問題を考えたり、日本のよさを改めて感じたりする場があり、自身を高める機会にもなった。

2016 年度国際教育事業について

1．アメリカへの短期留学　2015 年度末実施報告

例年、本校では春休み期間中にアメリカ短期留学の機会を設けている。２、３年生を対象に希望者を募り、前回第３回までは 26 名の参加者であったが、第４回である 2015 年度末からは、初めて 36 名に増やしての実施となった。第３回からの受け入れ校であるペンシルバニア州セラーズビルにあるフェイスクリスチャンアカデミーの好意で、10 名増を受け入れアレンジしてもらうことができた。応募者数は生徒に公表していないが、この年は 59 名の応募があり、抽選で選ばれた生徒 36 名（２年生 24 名（男子 7、女子 11）、３年生 12 名（男子 3、女子 9））が参加した。教員は前半２名、後半２名が引率した。

現地での日程は以下の通りである。３月 20 日～３月 29 日。修了式から１日空けての出発。

１日目：　予定通り、乗り継ぎのデトロイトの空港で、軽い夕食をそれぞれ買わせる。（初めての買い物）。ホテルに深夜 12 時過ぎに到着。N.Y のジョン・F・ケネディ国際空港到着。雪のため乗継便が欠航し、N.Y に一泊

２日目：　ホテルの朝食を２グループで時間をずらしてとらせ（場所が狭いため）た後、バスで学校のあるセラーズビルに移動。８時頃、学校のチャペルで、学校のバディと対面。授業へ。授業後迎えに来たホストファミリーと対面し家庭へ。

２～５日目（月～木）：ホスト校での授業参加・交流

５日目（木）　・３時まで通常授業を行った後、体育館で感謝を示すポスターを作成。これまでの写真と、生徒それぞれが書いた小さな紙を大きな色模造紙に貼った。

・ホスト校に留学している日本人高校生からお話をしてもらう。

・チャペルにてフェアウェル会。

本校からの学校紹介ビデオ（英語科教員による英語字幕あり）

感謝のパフォーマンス　「ヘビーローテーション」「デイドリームビリーバー」「カントリーロード」「上を向いて歩こう」「歓喜の歌」

感謝のスピーチ　生徒、教員　バディたちからの一言。

閉会。写真撮影。　体育館でお菓子を食べ、歓談。流れ解散。

６日目：　ホストスチューデント数名と共にフィラデルフィア観光（リバティベル、独立記念館、独立国立歴史モール、フィラデルフィア美術館等見学）

７、８日目（土・日）　ホストファミリーと週末を過ごす。夕食後集合。ホテルへ。

９～10 日目：　早朝起床し、空港へ。途中、機体トラブルのため、ミネアポリスに予定外に着陸し、４時間半遅れての解散。

今年初めて 36 名に増やしての実施であった。空港で集合しにくいのではないか、など心配されたが、その点は問題なかった。受け入れ校も授業教室を変えるなど、工夫して対応してくれ、ありがたかった。

毎年、参加生徒が、学校にどう成果を還元するかが課題となっている。今年は、２年生の参加が多かったこと、引率にその学年の教員が二人いたことから、新第３学年のＨＲＨでアメリカ留学の報告を行うことができた。また、参加者の文章をまとめた文集は毎年作成しているが、この年は、帰国後すぐにもっと短い短文を集めて学年通信に入れるなど、タイムリーな還元も行うことができた。まだ充分とは言えないが、今後も成果を広めていく方法を考えていきたい。



【学校生活】

・学校ではバディが高校１年生だった為、同じクラスに参加させてもらった。クラスの人達もとても親切で、何人もの人が留学生の僕と会話をしてくれた。国や人種を超えて優しく接してくれる生徒達にとても感動し、緊張もほぐれた。知らない人にでも気軽に話しかけられる皆の姿に感銘を受け、自分もこのような人間になりたいと感じた。授業は、数学・化学・音楽などは理解しやすかったが、国語や歴史はとても難しかった。少しでも理解したいと、分からない単語を次々に調べていることも楽しかった。バディとの会話も、最初は早くて理解出来ない時もあったが、耳も慣れてくると聞き取れるようになり嬉しかった。小さな達成感を積み重ねることが、次のステップへの意欲に繋がると感じた。

・発言数が多い。みんな、ものすごい頻度で手を挙げる。ただ、その答えが誤っていることも多い。つまり、よくわからなくても発言するのだ。間違えることや発言することに何の恥もないということが分かった。
→筑波も生徒が積極的な発言をする、と言われているが、世界と比べればまだまだ劣っている、ということを感じた。発言が積極的になるようにするためには、クラスの雰囲気を発言しやすい環境にする必要があると思った。発言の多さは、授業が生徒主体で動いていることの表れだと思う。生徒が授業を作っている感じをとても受けた。

・一度理科の授業で、私たち日本の生徒に質問されたときがあった。津波について何か知っていることはないか、言いたいことは？と。黙ったままで何もいえなかった。英語で言うのが難しいという理由もあったけれど、日本語でもなかなかすぐには答えられなかったと思う。これでは何も自分の考えが無い人、と思われてしまう。



今はもう日本国内だけではなくグローバルな人材、とか世界をまたにかけて活躍する人が増えてきている。そんな中、日本のこの発言をためらう癖は、悪い方向にしか働かない。少しでも何かいえるように、普段からいろいろ考えるようにしていきたいと思った。

【ホームステイ】

・僕の host family 先には、両親と子供２人、中国からの留学生も３人同居しており、同じ敷地内の隣の家には息子夫婦と子供４人が住んでいた。常に家の中には人が溢れ、英語が飛び交っていた。今回の留学では、積極的に英語を使って人と話そう思っていたので、寝る時以外は自室に戻らず、全てリビングで過ごし、会話の時間を多く設けていた。また、持参したお土産を渡す際にも、日本の紹介を交えながら、自分のことや日本のことを理解して貰えるよう努力していた。分からない時にはゆっくり話したり、単語を変えて話すと大体のことはお互いに理解することが出来た。アメリカ人、中国人、そして日本人という人種も文化も違う人々が、英語という共通の言語を使用することで、意思の疎通を図れるということを強く実感した。また、数日間一緒に過ごす中で、特に笑いあっている時は日本人と接している時と何の違いも無かった。自分たちが「人間」という同じ括りの中に居ると思うことが出来た。



【英語を話すことへの不安】



・不安なまま、２日目を迎えた。またもや、会話が弾まず、もうダメだ…そう思い始めたとき、周りの筑附の生徒を見た。英語を喋れなくても、楽しそうにバディーと会話しているではないか。何かを伝えようと、めちゃくちゃな文でも必死に話す姿。そうか、英語を話せるか話せないかじゃない、伝えようとするかだ！それに気づいてから、思い切って話しかけたら、時間はかかったけど、伝えることができた。それは、日本とアメリカという国、日本語と英語という言葉の壁を越えて、心が通じた瞬間。私は、すごく嬉しかった。他人とコミュニケーションをとる上で、大切なことを忘れていた。伝えようとする気持ちを。それから、私は頑張っていろいろ質問することから始めた。すると、バディーはそれに返してくれて、話が広がり、会話が楽しくなった。これで、楽しく生活していけると思った。

【キリスト教】



・私は教会が地域社会を生み出す中心地になっているように感じた。なんといっても現地は敷地が広くて移動はすべて車なので近所の人とたまたま遭遇して立ち話をするような機会は滅多にないだろう。その中で教会はご近所さんが集まって紹介したりされたりしながら全員が知り合いとなり、さらに同じ信仰を持っている人同士ということで一体感を生むのではないか。宗教が人々の人間関係までをも作り上げるということは今まで考えたことがなかった。



２．Hwa Chong Institution との短期交換留学

附属中の生徒がシンガポールに滞在

３月 27 日～４月６日に中学３年生（当時）男女各１名計２名が附属高校生ともに HCI へ短期留学した。引率教員は前半のみ１名であった。昨年同様に十分な滞在期間を確保することができ、参加した生徒たちは多くを学ぶことができた。短期留学に参加した生徒は、HCI の通常授業に参加した。授業は英語で行われ、最初はよくわからないことも多いものの、慣れてくると内容のすべてを理解することは難しくても、おおよそどのようなことが話されているのか理解できるようになってくるようだ。

留学期間中は HCI に通う生徒の家庭にホームステイをした。シンガポールにおける生活様式や文化などを、直接感じることのできる大変貴重な機会であった。





HCI の先生が本校を訪問

平成 28 年 11 月～ 12 月にかけて、HCI 生徒が附属高校に短期留学していた。例年は中学生との交流会が行われるが、今年は試験期間中ということもあり、HCI の先生が本校を訪問するにとどまった。

３．生徒・保護者・外来者へのアピール

国際交流の活動に参加した生徒たちの声を多くの人に届けられるよう、今年度も積極的なアピールの方法を工夫した。

まず、シンガポール交換留学、アメリカ留学に参加した生徒たちに報告ポスターを作ってもらい、パネルに掲示したものを、始業式（４月初）～ PTA 総会（５月初）の一カ月間は１階廊下にて、学芸発表会（11 月初）では交流会準備小委員会の展示教室にての２度にわたって一般公開した。ポスターの前で立ち止まる人も多く、いろいろな人の話題にのぼる良い機会となった。入試説明会ではアメリカ留学の報告冊子を展示し、さまざまな質問も寄せられ、興味・関心の高さを窺うことができた。

また、アメリカ留学プログラムの説明会には教員だけでなく、前年度に参加した（留学時中２だった）生徒にも出席してもらい、体験から学んだことや次の参加者へのメッセージを直接伝えた。説明会終了後には生徒や保護者からの細かい質問にも答えてくれ、双方向の良いコミュニケーションができた。参加人数増員によって、落選の涙をのむ生徒がかなり減った。

今後も生徒会新聞や PTA 会報なども利用して積極的な発信を続けていきたい。

４．少人数英語授業

昨年度に引き続き、ALT ２人体制で前期は中３、後期は中１・中２で１クラスを２グループに分けた少人数の英語授業を週１時間ずつ行うことができた。教室内に生徒が 20 人だけという環境では、教員の指示もよく通り、生徒は落ち着いて授業に取り組むことができ、理解度も高まっているようである。本校には英語科の特別教室がないため、授業教室（現在は図書室や調理室を使用）の確保が大きな課題である。授業プランの作成準備と合わせて留意事項として挙げておく。

５．教員・生徒の国際交流



海外から

４月18日　インドネシアより教育視察団来校。

５月24日　トルクメニスタンの教育関係者３名、視察筑波大学のロシア人の先生と共に、国立大学の附属学校を作るにあたっての視察。英語を参観した１年生のクラスでは、生徒と日本語での質疑の応答が行われた。参観は３年生の理科、１年生の英語でした。



５月 24 日



６月 29 日

６月29日　北米教師来校（経済広報センターより依頼）
中学３年生の公民の授業の参観および参加。中学生が日本の教育制度や学校の様子などを英語で説明。それを受けて関連する内容について、アメリカやカナダの様子を説明してもらった。最後はグループに１人以上の先生方がつき、生徒と英語で交流を行った。



７月７日　筑波大学教育研究科外国人教員研修留学生、来校。
同じく中学３年生の公民授業の参観と参加。
６月とは別の学級にて実施。



９月６日　JICA 課題別研修「学校体育」研修員視察ブータン、ブルキナファソ、フィジー、マラウイ、ミャンマー、ウガンダの６カ国から、計 12 人の教育関係者が来校、視察。体育の授業を参観した。６時間目は３年英語と２年社会に分かれて授業を参観し、その後は会議室にて生徒会役員３名による挨拶と質疑応答が行われた。

２月10日　タイ、コンケン大学の教員来校。国際回線を使っての数学授業



２月20日　タイ国会議員 12 名視察。授業参観。

海外へ
11月３日～５日　第３回日米韓ポエトリープログラムの韓国での会合に、２名参加。





グローバル人材の育成を目指して

１．本校の国際教育の特徴

2014 年度から、スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ校）としての取り組みが始まり２年目を迎えた。本校は、専門性と教養、問題解決能力、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、主体性と協調性、異文化理解の柔軟性と日本人としてのアイデンティティーを備える「グローバル・シチズン」の育成と、それらに加えて高い語学力、議論する力、地球規模の視点を有する「グローバル・リーダー」の育成を目指している。今年度も「グローバル・リーダーの育成」を中心に取り組んだ。

２．活動の具体

（1）アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（ＡＰＹＬＳ）

シンガポールにある Hwa Chong Institution（ホワチョン校）主催の第 10 回 Asia-Pacific Young Leaders Summit（APYLS）は、７月 17 ～ 28 日の日程で開催された。今年度の全体テーマ「Auguries of Growth（成長の前兆）」の下、英国、フランス、南アフリカ、オマーン、インド、インドネシア、シンガポール、マレーシア、オーストラリア、フィリピン、中国、韓国、米国、日本の 14 カ国 82 名が参加して行われた。日本からは、筑波大学附属高校の２年生竹俣太郎、稗田葉月、道園菜々子と麻布高校の２年生小原健人、高松祥大、服部穣計６人が参加した。



Hwa Chong Institution にて、参加者全員で記念撮影

APYLS は、将来を担う若者達の国際交流・友好関係の構築、国際問題の認識と解決を模索することをねらいとして、2006 年からホワチョン校が始めた国際交流事業である。本校は第１回から生徒を派遣している。大会期間中、参加生徒は他国の学生と、４人から６人の相部屋で、共同寮生活を送

り、１日 24 時間、異文化を直に体験し、受け入れながら個人的ネットワークを築く。

プログラムには、シンガポールの外務省を始めとする各省庁や大学教育機関、放送局や住宅開発機構等の訪問が組み込まれており、大臣や責任者の話を聞き、シンガポールの対外政策や教育方針、都市再開発計画について学習した。そして、今回は第 10 回記念大会だったため、最後にイスタナ（大統領府）で、トニータン大統領が自ら優秀発表を表彰してくださった。プログラムのハイライトは、Summit Dialogue と Student Dialogue。Summit Dialogue では、ホスト国の政・財・教育界を代表する人々の講演を聴き、世界の動向に対する理解を深めた。講演後の質疑応答では、日本代表の生徒達は全員が挙手して、質問を行い、積極的に議論に参加した。Student Dialogue では、事前に、各国代表者に対して、各国に関連した国際問題のテーマが与えられ、課題の調査・研究をもとに解決策を提案するという 20 分程度のプレゼンテーションを行う。日本に与えられた課題テーマは「Invisible Hand（インターネット見えざる手)」であった。インターネット使用では他人の意見に影響を受ける可能性もあるが、インターネットの奴隷とならず、良き使用者でいようという結論を導いた。その後の質疑応答では、各国代表者からの早口であまり聞き慣れない発音による矢継ぎ早の質問を乗り切り、フロアーから大きな喝采を受けた。また、引率者席の韓国とアメリカをはじめとする多くの先生方から「素晴らしい」というおほめの言葉をいただいた。閉会式の文化発表では、はっぴを身にまとい、現代風のダンスを組み込み、恒例となっている「よさこいそうらん節」を披露し、拍手喝采を浴びた。

参加者全員が、すべてのプログラムをやり終えた充実感と達成感とともに、世界の教育水準を体感し、これからの課題を胸に日本へ帰国した。



校舎前での記念撮影



各国の生徒と議論をする本校生徒



プレゼンテーションをする本校生徒



日本の文化紹介をする本校生徒

（2）国際学術シンポジウム（ＩＡＳ）



Hana Academy Seoul にて、参加者全員で記念撮影

７月に韓国のハナアカデミーソウルで開かれた国際学術シンポジウムに、本校から生徒３名（阿曽晴介、輿石彩花、町田華子）引率教員（熊田亘、曽根典夫）２名が参加した。本校チームは２回のセッションを発表し、他校からの質問にも十分に対応していた。

ＩＡＳは東アジアの高校生（約 220 名）による討論会である。今年度テーマは Ethics and Social Technology で、共通言語は英語である。３ヶ月間にわたってテーマに関するリサーチを行い、予稿の作成、プレゼンテーションの準備を行った。７月中旬に前哨戦として関東圏の４校間（鴎友学園、早稲田大学高等学院、早稲田大学本庄高等学院、筑波大附属）で本番さながらプレゼンテーションを行うことで論題への理解を深めるとともにプレゼンテーションの技術を磨いた。

７月にソウルに入ってからは、主催側のハナ高校生と親睦を深めるアクティビティが設定され、次にアカデミックな取り組み、そして後半に文化交流とホームステイと再び親睦を深める企画であった。生徒たちの感想文から「他校生徒との交流」と「発表・英語」に関する記述の両方が多く見られることからも、このシンポジウムの狙いが上手く生徒たちに届いていたと感じる。



プレゼンテーションをする本校生徒



シンポジウム後の本校生徒

（3）ＵＰＥＩ研修（プリンスエドワード島大学研修）



研修後の修了書を持つ本校生徒



「赤毛のアン」の舞台となった場所

第１回カナダ・プリンスエドワード島大学研修に 16 名が参加

スーパーグローバルハイスクール指定を受けながら、APYLS に３名、IAS に３名、UBC に３名、Hwa Chong 校との短期留学に６名、日中交流に 20 名しか海外に生徒を派遣できていないという実態から、さらに 16 名をカナダ・プリンスエドワード島大学（UPEI）に送り、研修を経験させるというプログラムが今年度から始まった。

８月 14 日から８月 28 日までの２週間、本校１年生 11 名と２年生５名がカナダ東海岸にあるプリンスエドワード島（PEI）のプリンスエドワード島大学を訪問した。大学では、ホームステイをしながら筑波大学附属高等学校用に開設された PEI の歴史、環境保護、移民等についての講義を聞き、同じく筑波大学附属高校用に設定された観劇の鑑賞や、赤毛のアンでおなじみのグリーンゲイブルズ訪問等のアクティビティーを行った。また、地元の国際バカロレア指定の高校生とのディスカッションや本校生によるプレゼンテーションを行った。PEI にはもともとファーストネイションが住んでいたが、フランス人が移民し、その後、七年戦争を経て英国領となった。さらに、カナダが独立する際、カナダ建国会議が開かれた島であり、SGH の研修をするのに歴史的に興味深い場所である。環境保護や移民の歴史についての講義をしてくれたのも、イギリスからの移民であるシュナイダーご夫妻であった。参加生徒は PEI の海岸浸食の問題やシリア難民受け入れ等の話を熱心に聞いた。最終日には各自の研究についてのプレゼンテーションを行い、UPEI の３人の先生方から質問を受けた。後日 UPEI の先生から送られた手紙の中で、筑波大附属高校の生徒は、これまで世話をした大学生や高校生と比較しても例外的に優れているというお褒めの言葉をいただいた。参加生徒はこの経験をもとに、将来のグローバルリーダーになることが期待される。



芋掘り体験をする本校生徒



講座を受講する本校生徒

（4）ＵＢＣ研修（「筑波・ＵＢＣグローバルリーダー育成プログラム」）

ブリティッシュコロンビア大学（UBC）研修で３名がカナダ・バンクーバーを訪問

本年度から UBC 研修は筑波大学附属学校教育局の主催となった。第１期７月 17 日～ 31 日、第２期７月 31 日～８月 13 日の日程でカナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学にて UBC 研修が行われた。本校からは２年生２名と３年生１名がブリティッシュコロンビア大学内の学生寮に泊まり、現地大学生や大学院生の世話のもと、大学教授による講義や授業外活動などを経験した。本校生徒は、同時期に研修を受けていた外国籍の高校生とグループを組み、前もって「地球規模で考える生命・環境・災害」「グローバル化と政治・経済・外交」の二つの課題から一つのテーマを選んで、研究をしてきた。そして、その成果を最終日に発表した。外国の仲間と一緒にグループプロジェクトを行うことにより、海外でも指導性が発揮できる資質が養われた。



この UBC 研修に向けた英語力を身につけるため、事前指導として、４月から７月まで英語研修および PPDAC に基づく問題解決学習についての研修を週１回程度筑波大学東京キャンパスで受けた。さらに、その効果測定のために事前と事後に TOEFL iBT を全員が受験した。さらに９月３日と 10 日に研究報告会と修了式を行い、研究の成果を筑波大学の先生方の前で報告した。この研修には筑波大学附属だけではなく、お茶の水女子大学附属や東京学芸大学附属からも参加者があったが、本校２年生の髙田茉恵さんがベストペーパーアワードを受賞した。



UBC プログラム参加の他国高校生と



プログラム中の休憩時間に

（5）日中高校生交流（７月招聘・10 月派遣）

日中両国の高校生が互いの国を訪問し、様々な活動を通じて理解を深めあう「日中高校生交流」。2016 年度は日中双方 70 名ずつ、計 140 名で交流が行われた。日本側は、本校のほかに千葉市立千葉高校 10 名、大分県の岩田高校 20 名、北海道の札幌日本大学高校 20 名の合計 70 名である。本校は、男女 10 名ずつが参加し、北京市内の２つの高校、北京匯文高校と三里屯第一高校との交流を行った。

７月 12 日、小大使活動の一環として、首相官邸を訪問した。首相官邸では、日本の高校生を代表して本校２年安東勇人さんが、今後の日中関係をよりよいものへ変えていきたいとスピーチをし、萩生田内閣官房副長官から激励の言葉を頂いた。13 日は、中国大使館を表敬訪問した。郭燕公使が日中両国の交流の歴史についてお話しになった後、日中両国の高校生からの質問にも丁寧に答えて下さ

り、その後の歓迎会では、本校の慣例になっているソーラン節を披露した。15 日は、中国の生徒さんが本校を訪問し、ペアの生徒と一緒に３時間授業を受けた。本校の生徒が同時通訳をしたり、数学の問題を一緒に解いたり、家庭科の授業では調理実習で親子丼を作ったりと、充実した学校生活を体験して貰えたのではないかと思っている。

10 月９日から 17 日までの９日間で、中国北京市を訪れた。表敬活動では、北京市人民政府において本校１年福家未紗さんが日本代表として挨拶をし、王安順市長より中日友好に向けて激励の言葉を頂いた。中華人民共和国外交部では、ニュースでよく見る海外プレスへの定例記者会見を傍聴し、耿爽報道官は生徒の質問に丁寧に答えて下さり、報道官としての苦労話なども伺うことができた。また日本大使館では、山本公使との質問会に参加した。大使館の役割などを話して下さり、歓迎会では、多くの来賓の方々から励ましの言葉を頂き、生徒たちは日中友好への思いを強くした。交流活動では、匯文高校と三里屯第一高校での授業へ参加し、生徒同士の交流を行った。同時にホームステイをして家族と一緒に料理をしたり、北京の街を歩いたりと温かい歓迎を受け、忘れがたい思い出となった。歴史文化活動として、多数のオリンピック選手を輩出したことで知られる什刹海体育学校を訪問し、卓球や太極拳を体験した。他にも、七宝焼の色付けや金属線付けを体験したり、中国の伝統芸能を楽しんだり、故宮、万里の長城、北京企画展覧館など中国の長い歴史を理解できる場所を見学するなど、たくさんの貴重な体験をした９日間だった。



貴重な経験を通じて、今後の日中関係を担って行くのは自分たちであるという意識が生まれてくれれば大変嬉しく思う交流であった。

（６）Hwa Chong 校との間での相互短期留学

シンガポールの Hwa Chong 校から７名の生徒が、11 月 27 日（日）～ 12 月６日（火）の期間、附属高校に短期留学した。期間中、女子５名、男子５名の生徒は附属高校の生徒の家にホームステイし、平日は本校の通常授業と部活動に参加、休日はホストファミリーと過ごした。

11 月 29 日（火）、昼休み時間の全校集会では、Hwa Chong 校の女子生徒 Charlotte さんが日本語で留学の抱負を述べ、附属高校側から生徒を代表して清水創太君が英語で歓迎の言葉を述べた。留学生は、通常授業を受けるだけでなく、休み時間などを通して附属高校のたくさんの仲間と交流した。休日にはホストの生徒と留学生とが全員で鎌倉を訪れ、日本の文化にも触れ、また、本校卒業生が案内して皇居、築地、東大キャンパスなどの見学もした。この相互短期留学は今年で 11 回め、来年 2017 年３月には附属高校から Hwa Chong 校に短期留学の予定である。



（7）ＳＧＨプログラム

「SGH スタディ」の授業（９月５日は１学年対象　26 日は２学年対象）において、夏休みに行われた「SGH プログラム（海外派遣）」に参加した生徒による報告会が行われた。APYLS（アジア太平洋リーダーズサミット：シンガポール）に参加した３名、IAS（国際シンポジウム：韓国・）参加に参加した３名、UPEI 研修（プリンスエドワード島大学：カナダ）に参加した 16 名の代表として１名が、課題研究の内容を英語で発表した。１年生にとっては、これから目指す方向性の指針に、２年生にとっては仲間が学んできたことの共有の場となった。発表したどの生徒にとっても、研究・研修をまとめる良い機会となり、今回の経験を今後の「SGH スタディ」に活かして欲しいと思う。そして「グローバル・リーダー」を目指す生徒に向けて、さまざまな立場の人をお招きし、国際的視野・国際的感覚を養うためのお話をいただいた。

①　講演「韓国の社会と文化」（本校卒業生中野多恵さん）



５月 25 日（水）放課後、本校卒業生で韓国梨花女子大学に留学し、現在東京外国語大学で学んでいる中野多恵氏の講演会が、本校被服室で開かれた。今年度韓国の国際学術シンポジウムとシンガポールのアジア・太平洋ヤングリーダーズサミットに参加する２年生と来年度国際学術シンポジウムへの参加を希望している１年生、さらに SGH スタディで韓国について研究することを希望している２年生など 27 名の生徒の参加があった。中野さんは韓国の国民性や日常生活、対日感情、若者から見た日韓関係までいろいろな話をしてくださり、たいへん有益な講演会であった。

②　講演「これからの中日関係―高校生に期待すること」（薛剣さん）

６月 25 日（土）13:00 ～ 14:30、桐陰会館にて、中華人民共和国駐日本国大使館　政治部公使参事官である薛剣（セツ・ケン）氏をお迎えして、表題の講演会が行われた。今年度日中高校生交流に参加する生徒と、北京での交流活動を共に行う千葉市立千葉高等学校の生徒と保護者、昨年交流活動に参加した２年生など、40 名余りの参加があった。薛氏の話は、中国の人たち、特に若者が日本に対してどんなイメージをもっているか、中国人と日本人の性格・行動・生活にどのような違いがあるか、１人っ子政策のために起こっている少子高齢化の問題など、多岐にわたるものであった。日中関係の微妙な問題が顕在化している今日でありながらも、国民レベル、特に若い人たちの交流を通じて、両国の問題が少しでも良好なものになってほしいという話を聞き、この交流の大切さを生徒も改めて感じたようであった。



③　EU セミナー「EU が学校にやってくる」

11 月 15 日（火）６限に、１年生を対象として講演会「EU があなたの学校にやってくる」が行われた。この企画は毎年恒例のもので、今年は欧州中日連合代表部大使ヴォレル・イスティチョアイア・ブドウラ氏が講師として来校してくだった。また、放課後には 23 名の希望者を対象に、第２部として「EU セミナー」も実施され、講演「EU について」では、EU 自体について、そして日本と EU の関係についてお話をいただいた。放課後の「EU セミナー」では、講師は、EU が直面している移民や難民の問題などについて話してくださったほか、生徒の質問にも丁寧に答えてくださった。講師と生徒の懇談は出発直前まで続き、参加した生徒はこの講演会とセミナーを通して、日本と EU の関わりについて一層興味をもったようである。



④　講演「アラスカで写真を撮ることとは」（松本紀生さん）

12 月 13 日（火）、アラスカ写真家の松本紀生氏（愛媛県在住）を迎え、標記の講演会が２年生全員を対象に開かれた。自身が撮影したクジラ、カリブー、オーロラの写真やビデオを示しながら、松本氏は「マイナス 40 度の世界で３か月も暮らしていても、好きなことだから辛くないんです」と述べられた。多くの生徒が、その感想の中で「ただ大学進学を目指すだけではなくて、松本氏のように自分の『好きなこと』を探してみたい」と書いていた。



⑤　講演「海外体験をすることの意味－グローバル社会が求めるもの」（本校卒業生木村元気さん）

２月１日（水）放課後、今年附属高校から海外交流に派遣される生徒や海外交流に関心のある生徒 15 名に対して、本校卒業生の木村元気氏の講演を行った。木村さんは現在東京大学４年生で、高校では APYLS や日中高校生交流に派遣された。大学ではイギリス・ロンドン大学、ロシア・サンクトペテルブルク大学に留学し、日本代表としてアジアエコリーダース（於ベトナム）にも参加している。この４月からは財務省に勤務することになっている。講演では自らの海外での体験を映像を使って紹介し、高校生、大学生のうちに海外体験することの意味や価値について語られた。木村氏の言葉を紹介する。「海外では国の中に多くの民族が共存しているのがむしろ当たり前で、そうした国際社会を舞台に学び、あるいは働いていくには、自分が日本人としてのアイデンティティーを強く意識しかつ自覚することが大切です。」「自分の存在を明確に主張することなくして他の国やまた他の民族を深く理解することはできません。」「語学ももちろん大切ですが、それ以上に自分自身の足で海外に出てみて、そこで様々な背景の異なる人々と直に交わる意欲と積極性が大事です。」「そういった考えが、今の自分の基本になっています。」



木村氏の上のようなメッセージに対して、参加した在校生からは次々と質問の手があがり、活発な意見交換が行われました。

2016 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外での活躍

１．本校の国際教育の概要

本校は、スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の指定を受けて今年度で３期 15 年目となる。ＳＳＨ事業の支援を受ける国際交流活動の中で最も大規模なものとしては、2009 年より続いている、本校姉妹校の台中第一高級中学（台中一中）との研究交流が挙げられる。また本校最大の特徴として、理科・数学に限定したＳＳＨプログラムや、理系に特化したＳＳＨクラスなどは設置せず、全教科において何らかの形でＳＳＨ事業に関わることをモットーとしている。理系だけでなく全生徒に幅広い活躍の機会を与えるための交流事業として、本校国際交流事業のもう一本の大きな柱である釜山国際高校との交流も 2013 年より続けている。また、平成 25 年度にイングリッシュルーム事業をスタートさせ、英語による学術発表の基礎となる英語でのコミュニケーションの機会を全生徒に提供するだけでなく、実際に海外などで発表をする生徒のプレゼンテーション事前準備にも大いに役立っている。

本校における国際教育の目標は、中高６年を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

２．平成 28 年度活動報告

本校の国際交流プログラムは昨年度と同様、本校単独で企画、実施する、台中一中および釜山国際高校との交流事業と、他のＳＳＨ校（立命館高校・横浜サイエンスフロンティア高校）企画に、本校生徒・引率教員が参加する形態の２つに分類される。これら以外の活動と合わせて、順に紹介する。



台中第一高級中学訪問

（1）台中第一高級中学（台中一中）

本校の SSH 関連国際交流事業として 2009 年に始まり、今年度で 8 年目となる。当初は本校から先方への訪問のみであったが、2013 年に台中一中の日本訪問旅行に合わせた本校訪問が実現し、本校では国際交流デーとして 1 日の特別スケジュールを組んで迎えた。2015 年には 2 回目の国際交流デーを成功裏に終え、来年度 5 月には第 3 回を予定している。（台中一中は関東と関西を隔年で交互に訪問）

台中一中訪問

今年度も 12 月 13 ～ 18 日の日程で、20 名の生徒（高 1 ・13 名、高 2 ・17 名）と引率教員 4 名が、台湾を訪れ、15・16 日に台中一中を訪問した。2 日間に渡る、筑駒 7 報、台中一中 7 報の英語による研究発表（質疑応答含む）をメインとして、授業（数学）への参加、双方の学校紹介、文化交流（パフォーマンス披露）なども例年通り行われた。テーマは理科・数学に関するものが多かったが、水俣病など社会的なテーマを扱った発表も行われた。また、昼休みには一緒にスポーツをしたり、終了後には夜市へと案内されたりと生徒同士の交流も大いに盛り上がり、本校生徒は、5 月の国際交流デー（台中一中日本訪問）に向けての意欲を新たにしていた。



歓迎セレモニー



数学授業参加



研究発表会場



学校紹介



研究発表（物理）



研究発表（水俣病）

（2）韓国・釜山国際高校

本校国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系生徒向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013 年度より続いている。ここ数年続いていた、釜山国際高校の日本訪問が今年度は行われず、今年度の交流は、2017 年 3 月予定の韓国訪問のみとなった。ここでは 2015 年度の韓国（釜山）訪問について報告する。

釜山国際高校訪問

2016 年 3 月 27 ～ 31 日、12 名の生徒（高 1、高 2 各 6 名）と引率教員 3 名が韓国・釜山を訪問し、その内の 1 日ずつで、釜山国際高校（BIHS）と韓国科学アカデミー（KSA）の 2 高校を訪問した。釜山国際高校では午前中に授業参加や日韓文化に関するプレゼンテーションを行い、午後は近郊散策などほぼ丸一日交流を楽しんだ。


韓国科学アカデミー訪問


授業参加（釜山国際高校）


研究発表（釜山国際高校）


発表会場（釜山国際高校）


釜山国際高校生徒と（１）


釜山国際高校生徒と（２）

（３）その他の国際交流事業

①　立命館高校プログラム・共同課題研究海外研修（北京）（７月 24 日～８月１日）

立命館高校・ＳＳＨ科学技術人材育成重点枠事業「海外校との共同研究の取り組み」に、本校生徒３名が参加した。（８校参加）６月の東京研修で各校ごとに与えられたテーマ（本校は化学）の研究を行い、北京航空航天大学附属中学での Science Fair ではポスター・口頭発表を行った。


北京航空航天大学附属中学


理科実験


飛行機作製


ポスター発表


口頭発表



修了式

② ＹＳＦ高校プログラム・Thomas Jefferson 高校サイエンス研修（アメリカ）（2017 年１月９～14 日）

横浜サイエンスフロンティア高校のＳＳＨプログラム「トマスジェファーソン高校サイエンス研修」に、本校生徒２名が参加し、アメリカ・ワシントンＤＣ近郊にある同校での授業に参加し、研究発表（ポスター）を行った。スミソニアン博物館や NASA、アメリカ国立衛生研究所などの研究施設見学も行い、現地の日本人研究者たちに、海外で研究者となった経緯などの有益な話を伺うことができた。


ポスター発表（１）

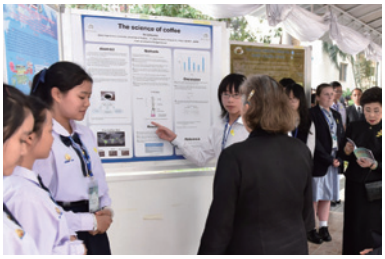

ポスター発表（２）



学校紹介

③ Thailand International Science Fair 2017（TISF 2017）（2017 年１月４～ 10 日／移動日含む）

昨年度、王女 60 歳の誕生日を記念して行われたサイエンスフェアを継続する形で、16 ヶ国から 26 校（日本４校）を招待して行われた。本校生徒３名が参加して、それぞれポスター・口頭発表を行い、ポスター発表ではタイ王女直々に質問をいただく栄誉に浴した。また、フェア中の様々なプログラムによって、タイや他の参加国の文化に直に触れることもできた。


ポスター発表



口頭発表



修了式

（４）その他の活動

2017 年２月 18 日、同年度（前年度）国際交流プログラム参加生徒による報告会が行われ、各プログラム概要やアドバイス、実際の研究発表（抜粋）などが伝えられた。国際交流に関心を持ち、参加を考えている中学生にとって有益な情報伝達の場となった。

また、筑波大学の教員研修留学生を本校音楽祭と文化祭に招待する企画を本年も実施し、事後感想文ではそれぞれの行事に対して高い評価をいただいた。


国際交流プログラム報告会


教員研修留学生（音楽祭訪問）


教員研修留学生（文化祭訪問）

（文責：研究部・国際交流係　山田忠弘）

附属坂戸高等学校

国内外の人々が集い学びあうオープンプラットホームスクールを目指して 2

1．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」をはじめ、インドネシア・タイ・台湾などにある学校との交流、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成 26 年から 5 年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

1946 年に地元の農業高校として発足してから 70 年、1994 年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして、とくに平成 26 年度の SGH 指定後は、グローバル社会におけるキャリア教育を充実させながら、さらなる実践を積み重ねている。また、本年度 2 月に、国際バカロレア日本語 DP 校に認定をうけた。本校は SGH と IB の双方に関わる大きな転換点にたっている。

「総合学科」＋「SGH」＋「IB」、その先の本校の進む道は「オープンプラットホームスクール」と考えている。日本や世界各地からさまざまな学校、人が集い、地域の人々とも交流し、相互の違いを認め合いながら、学校に関わったそれぞれが学びあい成長していく。そんな学校になれたらと日々努力を重ねている。本稿では、本校の国際教育活動の柱である高校生国際 ESD シンポジウムおよび海外卒業研究支援制度について報告する。



第 5 回高校生国際 ESD シンポジウム・第 2 回全国 SGH 校生徒成果発表会
―海外 4 校、SGH 校 40 校が参加―
（2016 年 11 月 10 日、於：筑波大学東京キャンパス）

２．「第５回高校生国際 ESD シンポジウム@東京 2015」・「第２回全国 SGH 校生徒成果発表会」の開催

ESD とは Education for Sustainable Development（持続発展可能な社会づくりのための教育）のことである。これまで本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012 年から実施している。一昨年度から組織した S-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）のメンバー（本校の１～３年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している）が中心となって、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行った。

本年度は、平成 28 年 11 月 10 日、筑波大学東京キャンパスを会場に実施した。シンポジウムの、メインテーマを、「SDGs and High School Students　－ 17 goals to change our world －　～ SDGs と高校生：17 の開発目標から創造する私たちの未来～」として、各発表が統一感をもった形にした。

午前中は、国際連携協定を結んでいるインドネシア環境林業省附属高等学校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校、フィリピン大学附属高等学校、そしてタイ・カセサート大学附属高等学校から各校の ESD に関する活動報告を行った。本年度は新たに SGH 指定校である東京学芸大学附属国際中等高等学校の皆さんにも高等発表をお願いした。SDGs をメインテーマにしたことで、各校の活動が有機的にリンクし、中身のこい発表となった。

午後は、第２回全国 SGH 校生徒成果発表会を開催した。北海道から沖縄まで全国から参加があり、海外校もいれると 40 校もの参加があった。各校の課題研究活動の成果をもちよりポスターで発表を行った。各校の課題研究活動が、SDGs の 17 の目標のどれにあたるかを各校のポスターに提示してもらい、テーマの明確化を図った。

会場となった教室は満席となり補助席を出すほどの盛況で、熱心な議論が交わされた。進行はすべて英語で行われた。今回、JICA 国際協力機構のブースを作り、フィリピンゾーンやタイゾーンなど、本校の連携校と他の SGH 校の皆さんが交流を深められるような工夫も行った。本校の国際教育活動では「オープンプラットフォームスクール」を掲げている。本校がハブとなり国内外の多くの人が出会い学びあえる場を提供していきたい。来年も 11 月上旬に開催予定である。



受付や会場案内も生徒が中心で実施



各校代表生徒による SDGs 宣言



国内外の生徒のディスカッションの様子


カラスカルフィリピン附属高校校長の講評

３.「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、３年次の学校指定必履修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 27 年度までの８年間で計 51 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 17 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

28 年度においては２年次生を対象に募集した結果、４名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	カンボジア	地域素材を活用した義足の開発
B	インドネシア	RSPO 認証をうけたパーム油の生産の可能性
C	タイ	タイの食品に関する研究
D	フィリピン	K-12 の教育制度に関する研究

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒Ｂの１名を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施しているが、２年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っている影響からかアセアンに関する課題が多く見られる。また、テーマがより具体的で多岐にわたっており、総合学科における学びの成果が見受けられる。一方で、SGH 指定後、本年度が過去最低の応募者数となった。原因として、校内の行事が増えて生徒も多忙になっている、代表者の発表内容が毎年向上してきており「自分にはとてもできない」と萎縮してきているといったことも考えられる。

４. 生徒の変容について

SGH 指定３年目に入り、全校を対象にした国際教育活動も浸透してきた。生徒の変容に関しては、現在、教育局が作成した評価票を分析中のため、詳細の報告は本校の SGH 報告書に譲るが、文部科学省が SGH の成果指標にしている「卒業時における生徒の４技能の総合的な英語力として CEFR のＢ１～Ｂ２レベルの生徒の割合」は、指定前はわずかに３％であったが、本年度は SGH 対象生徒は 36％に達している。また、インドネシア語検定の合格者もでた。

また、自主的に海外に行く生徒数も増加しており、すでに留学することが特別なことでなくなってきている。１年生の「産業社会と人間」の授業や、２年次の「T-GAP」の授業で、SGH 開発科目であるグローバルライフでグローバルな課題に目が行くようになったと回答する生徒も増えてきた。確実に、生徒のなかでグローバルな意識が育ってきている。



フィリピン大学附属ルーラル高等学校と国際連携協定を締結



SGH 国際 FW も３年目に入りました

【資料】平成 28 年度 国際教育・ESD 活動一覧（抜粋）

４月	時間割外科目「インドネシア語Ⅱ」（１単位）開講
７月	３年生２名が姉妹校コルニタ高校に１年留学へ
８月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施　生徒７名教員３名参加
８月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施　生徒 25 名教員６名参加
８月	教員２名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでバンクーバーに渡航
８月	第 53 回全国国際教育研究大会高知大会　教員１名発表
９月	インドネシア・フィンランド・メキシコから３名の留学生が来校（１年間）
10 月	姉妹校コルニタ高校から４名の留学生が来校（３週間）
11 月	高校生国際 ESD シンポジウム@東京 2016（第５回）開催（坂戸＋茗荷谷）
11 月	第２回 SGH 生徒成果発表会開催　海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
11 月	フィリピン大学附属高等学校と協定校提携調印
11 月	国際協力機構（JICA）青年海外協力隊 OV ８名の出前講座
12 月	全国 SGH フォーラムで本校教員が事例報告
２月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒３名・教員１名がインドネシア渡航
２月	第３回 SGH 研究大会・第 20 回総合学科研究大会開催
２月	株式会社 IC-NET 主催 40 億人のためのビジネスコンテスト参加
２月	埼玉県観光課以来のインバウンド中国教育視察団受け入れ
２月	栃木県立佐野高等学校 SGH 研究大会に生徒２名参加
２月	東京学芸大学主催都内国立大学附属高等学校 SSH/SGH 研究大会に生徒５名参加
３月	インドネシア中部ジャワ州ジョクジャカルタ第６高等学校受け入れ
３月	第６回サイエンスインカレ@筑波大学で SGH 活動の報告
３月	１年次海外校外学習（カナダ・バンクーバー）実施
３月	SGH 国際フィールドワーク「インドネシア・ボゴールリーダー会議」 教員２名、生徒２名渡航、インドネシア政府およびユネスコ国内委員会で協議

（文責：建元喜寿、今野良祐）

トビタテ！留学 JAPAN　チェコ共和国での留学経験から世界で活躍するリーダーへ

１．本校の国際教育の特徴

今年度の本校国際教育活動は、高等部で「海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちは」として、高等部生２名がタイを訪問し、「アークどこでも本読み隊」運営者として活動する本校卒業生との交流を行い、専攻科鍼灸手技療法科では「ミャンマーとの交流と支援（先輩から学ぶ今後の具体的活動の方向性）」として、鍼灸科に在籍する留学生が先に帰国した先輩留学生を訪ね情報交換した。高等部国際交流部でも、フィリピン障害者支援事業プロジェクトマネージャーを勤める本校卒業生を招き、フィリピンの盲学校での教育現状等について話を聞いた。卒業生との繋がりを活かした活動は、ここ数年確実に強化され広がりを見せている。高等部のタイ訪問は継続して行われており、鍼灸手技療法科ではこれまでにもマレーシア・台湾から先輩留学生を招き実技研修を行っている。

また、今年度の特徴的活動として、本校として初めてとなる国際協力協定をインド共和国国立視覚障害者施設（ＮＩＶＨ）と締結したことが挙げられる。これにより本校鍼灸手技療法科がインド共和国の視覚障害者職業自立支援を継続して行う基盤が整備された。この成果につながるＪＩＣＡプログラムにおいても、本校卒業生が現地担当者として３年間にわたって活動している。

こうした国際性を持って活躍する先輩・卒業生との繋がりをさらに強化しつつ、筑波大学や他大学留学生やボランティア団体、支援組織との連携を深め、本校の国際教育活動を推進していきたい。

（文責：黒岩　聡）



トビタテ！留学 JAPAN　チェコ共和国でのクリスマス体験

２．海外で活躍する先輩を訪ねて　タイで学んだ異文化体験から自らの視野を広げる機会に

（１）海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちはプログラムについて

本プログラムは、筑波大学附属学校教育局・教育長裁量経費をいただき、海外で活躍する先輩のもとを生徒たちが実際に訪れ、本校卒業生やタイの盲学校の生徒たちとの交流や、視覚障害当事者や支援者との交流を通して、異文化や視覚障害者のアクセシビリティを学ぶことを目的としたプログラムである。

本年度で第２回目を実施することができ、昨年に引き続きタイ王国で「アークどこでも本読み隊」を運営され、現地で活躍されている本校卒業生の堀内佳美さんやバンコクのタマサート大学の障害学生支援センターでご勤務されているジンタナーさんと共に５日間、タイ北部のチェンマイで研修した。

（２）主な活動内容について

１日目（12 月 20 日）

・タイ・バンコク経由で、チェンマイに向けて出発

・チェンマイ国際空港到着、５日間お世話になる堀内さん、ジンタナーさんと対面。

・ガンさん（全盲の学生さん）との交流会

ガンさんはチェンマイ盲学校出身で、現在チェンマイ市内のラチャパット大学に在籍している。来日経験もあり、タイで日本語を勉強している。チェンマイ盲学校での授業や学校の様子の話と本校での学校の様子の違いについて意見交換し、またタイの大学生活の学習や支援について話を伺った。

２日目（12 月 21 日）

・生徒２人の念願のお寺巡り

・チェマイ盲学校（タイ北部盲学校）訪問

チェンマイ盲学校では、授業見学と生徒同士のゴールボール交流試合や交流会を行った。立木は、日本の視覚障害スポーツについて映像も活用しながらの発表、横山は実際に日本から実験道具を持ち込み、触ってわかる理科実験について発表した。また、お土産で持ってきた折り紙や竹とんぼなどの日本の遊びについても披露した。ゴールボールの試合は白熱した試合となり、より両校の生徒同士の絆が深まった。

・チェンマイ盲学校に在籍し、近くの統合校に通う同学年の生徒との交流会

チェンマイ盲学校の高等部の生徒は、全員統合教育を受けている。３名の生徒と学校生活や好きなスポーツ、休日の過ごし方の話など、タイ北部の民族料理を食べながら交流を楽しんだ。








３日目（12 月 22 日）

・生徒２人の念願のお寺巡り　ドイステープ寺院（ステープ山の山頂にあるお寺）訪問

・少数民族が暮らすモン族の村で過ごす体験

タイ北部で暮らす少数民族の村で、村の子どもたちと交流。村では、お餅つき体験、モン族の衣装を着て、村の子どもたちの踊りを見学。モン族の暮らしを実体験できた。





４日目（12 月 23 日）

・チェンマイ市内に戻り、メーサーエレファントキャンプ訪問。

２人のタイでやってみたいことの１つである、ゾウのショー見学とゾウに乗る体験ができた。

・バンコクへ飛行機で移動。わんこタイラーメン体験、クリスマスイルミネーション見学、バイクタクシー、トゥクトゥク乗車体験。

・全員でタイ研修を振り返って

異文化体験を通して、堀内さんやジンタナーさんから多くのことを学べた。生徒たちは世界を舞台に活躍する堀内さんから、タイでの移動図書館を運営するに当たっての思いや海外で活躍することの楽しさと苦労などのお話を伺うなど、彼女から吸収するものが多く、日々刺激を受けていた。

５日目（12 月 24 日）

・日本に帰国





（３）研修を通して学んだこと（研修生の感想）

高等部普通科１年　横山政輝

今回の研修の中で、少数民族のモン族の村にあるゲストハウスに宿泊しました。そこで村の様子を見たり、お餅をご馳走になりました。村は多少観光客向けの雰囲気があるのですが、コーヒー栽培の様子や犬と遊ぶ子供達、村のお正月の準備などを見ていると本来の村の様子を見ることができました。日本と違う文化の美しさを学ぶとともに、モン族もお正月にはお餅を食べるなど日本との繋がりも感じることができました。またタイで活躍する私の先輩に直にお会いすることで、将来への更なるインスパイアーが湧いてきました。私は今後、さらなる経験のために長期留学を考えています。そしていずれは堀内さんのように、誰かのために活躍できる立派な視覚障害者となることを目指しています。

高等部普通科２年　立木勇弥

将来私が海外へはばたくための第一歩となる研修でした。チェンマイ盲学校を訪問し、校内見学やスポーツ交流、プレゼンテーションを通して国境を越えた盲学校同士の情報交換を図り、互いの盲学校の様子や状況を共有することができたことが一番印象に残っています。私はタイにはいまだ認知されていない日本発祥の視覚障害者スポーツを紹介することで視覚障害者スポーツの発展に少しでも役に立ちたいという思いを込めて発表しました。また、ゴールボールのスポーツ交流ができ、スポーツは国境を、言語を、文化を、超えてお互いに楽しみあうことができるものだと改めて思いました。

（文責：佐藤北斗）

３．トビタテ！留学 JAPAN　チェコ共和国での留学経験から世界で活躍するリーダーへ

（1）トビタテ！留学 JAPAN の制度でチェコ共和国へ

トビタテ！留学 JAPAN（以下、トビタテ）高校生コースは将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する制度である。

本年度、本校高等部２年の生徒２名がトビタテのアカデミック・ショートコースに合格し、チェコ共和国（以降、チェコ）に留学できる機会を得た。チェコが留学先となる経緯は、本校国際交流部で活動している The World of Friendship において、昨年度部員の生徒たちが調査した国がチェコであること。筑波大学に在籍するチェコからの留学生とこの活動を通して出会い、彼が実家のリベレツにあるリベレツ特別支援学校に本校生徒の留学の受け入れを交渉してくれたことで、この留学が実現した。

（2）主な活動内容について

留学期間：2016 年 9 月 17 日（土）～ 10 月 9 日（日）19 日間　　宿泊先：ホームステイ

○ Základní Škola a Mateřská Školá Pro Tělesně Postižené LIBEREC（リベレツ特別支援学校）
- 日本の高校生の休日の過ごし方や日本の文化についての２人の発表、生徒同士の交流と行事の参加、英語や社会などの授業参加、心のケア「リラクゼーションルーム」での取り組みを学ぶ

○ Zš Skálova TURNOV（トゥルノフ小中高等学校）
- インクルーシブ教育実践校での授業参加と２人の発表（日本の学校生活や視覚支援機器の発表）

○ Univerzita Karlova v Praze（カレル大学・プラハ）の日本学科の授業に参加

○ Gymnázium pro ZP a SOŠ pro ZP（プラハの視覚支援学校）と Škola Jaroslava Ježka（イェジェク特別支援学校）訪問。ゴールボールや Show down の体育の授業などに参加

○異文化体験他
- クリスマス体験やボヘミアグラス作り体験
- プラハのマラソン大会に外国人として初参加

（3）研修を通して学んだこと（生徒の感想）

高等部普通科２年　渡辺麻姫

現地でのやり取りはほとんど英語でしたが、ホストファミリーのお母さんの英語は片言で、お父さんは全く話せませんでした。しかし最後には、お母さんとは日常会話だけでなくジョークなども言い合えるようになり、お父さんも挨拶を英語でしてくれるようになりました。私も積極的にコミュニケーションをとるようにしましたが、ホストファミリーが私を障害者だからとか、外国人だからというバリアを張らずに接してくれたおかげで、「心の距離の近さ」を実感できました。

高等部普通科２年　青木悠弥

留学前は、チェコのインクルーシブ教育は必ず同一の場所で学べる教育だと思っていましたが、ニーズによってはインクルーシブ教育が十分ではないケースもあるかもしれないと思うようになりました。日本でも特別支援学校と連携し、誰でも普通校に通うことが困難ではない環境になれば良いと思っています。チェコでの経験を糧に、将来日本の共生社会の実現に携わっていきたいです。

（文責：佐藤北斗）







４．高等部国際交流部 「The World of Friendship」活動を通してペルー共和国を紹介

（１）本校の高等部国際交流部について

本校高等部の国際交流部は、生徒たちの英語のスキルアップと、様々な異文化に触れることを目的に活動しているクラブである。月に１度、校外のボランティア団体との英語での交流会を行っている。

（２）The World of Friendship 活動について

The World of Friendship とは、本校で行われる文化祭に向けて生徒たちが興味のある国について取り上げ、展示という形で紹介する活動のことである。本年度はペルー共和国について取り上げた。

ペルー出身で筑波大学大学院に在籍するロドリゲス・サカイさんを本校にお招きして、サカイさんが撮影した写真や動画を楽しみながら、ペルーの概要について学んだ。

また、恵比寿にあるペルー料理店を実際に訪問して、ペルーの食文化を味わいつつ様々な食べ物についてお店の方に調査したり、広尾にあるペルー大使館を訪問し、歴史、文化、教育などのお話を伺った。当日は、エラルド・エスカラ大使にもお会いし、交流する機会を得た。

その後、生徒たちは学んだことをまとめ上げて、文化祭に向けて準備した。また、本年度はアップルストア銀座にて i-Movie アプリでのムービーの作成の方法を学び、調査活動で撮った写真や動画を編集し、生徒たちのナレーション付きのペルーを紹介する動画も披露することができた。







（文責：高等部国際交流部顧問　佐藤北斗）

５．話してみよう、聞いてみよう！ 通じるかな？ 僕の、私の英語 ～高等部英語科の一つの取り組みについて～

（１）スカイプを用いた英語の授業

英語でのコミュニケーション力向上を目指して、今年度 11 月より月２回、高等部１年生のクラスでスカイプを活用した授業を実施した。相手校は本校の英語補助員の Ms. Michal Small のご紹介により、東京都調布市にあるアメリカンスクール（ASIJ）の高校生である。スカイプ２台を使用して、本校生徒２名、ASIJ の生徒２～３名で臨場感あふれる 10 分間の言語活動となっている。トピックは本校で設定し、ASIJ の生徒たちが質問を作りそれをベースに会話をしている。２月で６回の実施となった。同年代の生徒が相手ということが本校生徒に安心感と緊張感を持たせるようだ。

スカイプ授業後はアンケートシートに what I have learned about my partner.（英語）と my comment（英日どちらでも）という形で提出させている。そのコメントを幾つか紹介する。



実施２回目のアンケートでは、“This experience is very fun and important.”「相手の方の発音が良かった分、聞き取るのが難しかったです。」というコメントがあり、数回後では「自分のしゃべる言葉に精一杯で相手の話を聞くことに気が回せなくなっているので、少しずつ慣れていきたい。」「少しずつ慣れてきた。それでも緊張する。続けていけばスムーズに会話が楽しめるかもしれない。」などのコメントがあった。

最初は自分の話すことに精一杯であったが、回数を重ねていくうちに聞き返すフレーズ Pardon? Can you repeat it again? などを使えるようになったり、相手の話に “That’s nice! など返せるようになってきた。今後も活気あるコミュニケーション活動を目指していきたい。

（2）アフリカ・太平洋諸国 JICA 研修員との交流

毎年、本校に JICA より実に様々な研修員の方々が来校される。本年度はアフリカ・太平洋諸国からの出身者がお越しになり、秋に高等部２年生のクラスにて彼らとの交流授業を実施した。

生徒にとっては初めての耳にする国名や、名前は聞いたことはあるけれどもどんな国？だろうかと思いながら事前授業を行い、質問項目を決めた。興味深々の気持ちと通じるかな？という心配の入り混じるなかで当日を迎えた。前半に生徒によるプレゼンテーション、後半にグループに分かれて話し合いをした。結果、研修員の方々の温かい姿勢に後押しされて充実した活動となった。グループ活動では、普段の授業で積極的な生徒はいっそう熱心に聞き、比較的静かな生徒においてもエネルギッシュな研修員の質問に一生懸命応えようと頑張っていた。



≪プレゼンテーションの様子≫



≪グループ活動≫

生徒の感想

・“This was very fun. Usually I can’t talk with people from the Solomon Islands, Swaziland and Kenya. So I’m very happy to talk with them and know about their cultures. And many guests were active. So I could enjoy communicating with them.

・知らない英単語もあり、分からないこともあったけれど、色々な国の方と話すことができて良かった。

（文責：英語科　大橋映子）

６．本校鍼灸手技療法科留学生と小学部児童の交流会

本校鍼灸手技療法科（以下、鍼灸科）には、鍼、灸、按摩を専門的に学んでいる留学生が数名在籍している。本校の小学部の児童にとって、留学生たちは「同じ校舎で学ぶ外国人」という存在であり、国際理解教育を行う上では、交流を行いやすい非常に恵まれた環境にあるといえる。しかしながら、学部が異なるために、児童と留学生たちとが自然な形で触れ合う機会はなかなか持てなかった。

そこで、小学部児童の国際理解教育を推進するため、昨年度実施した本校鍼灸科在籍留学生との交流会を今年度も設けることとなった。留学生の出身国の文化や言語等を聞いて各々の国について興味・関心を持つこと、また、自分たちと同じ視覚障害をもつ留学生の存在を知ることで身近な外国人に関心を持ち、自ら積極的に関わろうとする意欲を育むことを目的とした。

交流会の実施にあたり、事前に打ち合わせを行い、留学生には以下のような観点で、話す内容をあらかじめ準備してもらった。

①各留学生の自己紹介

・自身の障害（見え方）について

・生い立ち

・留学のきっかけ

・将来の目標

・留学して良かったこと、困ったこと等

②各国の概要についての紹介

地理、自然、文化、言語等

交流会は平成 28 年 12 月 5 日に行われた。参加者は小学部５、６年生児童 14 名、鍼灸科留学生３名で、留学生の出身国は、キルギスが２名、ミャンマーが１名であった。

留学生の流暢な日本語で、自己紹介をしてもらった。その後、日本との比較を交えながら、それぞれの国の風土に関する話を聞くことができた。キルギスの留学生は児童が楽しめるゲームを紹介し、また、ミャンマーの留学生は児童が触れるように実際の民族衣装を用意し、分かりやすく両国と日本との文化の違いを説明してくれた。あっという間の 45 分間でとても充実した交流会となった。

以下は参加した児童の感想である。

・日本語が上手くて驚いた。
・留学生の方も点字を使っていることが分かった。
・ピアノが好きとおっしゃっていたので、自分も同じでうれしかった。
・ミャンマーとキルギスの国の面積・人口や観光地、湖の広さ、山の高さを日本と比べてくれたので、分かりやすかった。
・キルギスのゲーム「金の指輪とんで来い」がよく分かって楽しかった。
・ミャンマーの衣装は筒状になっていて、どうやってはくのかと思ったけれど、はいて見せてくれたり、触らせてくれたりしたのでよく分かった。服が国によって違うことが分かった。
・今度はミャンマーの女の人のズボンも見てみたい。

参加児童のほとんどが留学生の話を興味深く聞いており、異文化への関心が高まるきっかけとなった。交流を通して「留学生とまた会いたい」という気持ちを抱いた児童もいる。今後も鍼灸科留学生と小学部児童との交流の機会を設定し、互いの交流を継続・発展させていきたいと考えている。

（文責：佐東真由子）

７．インド共和国における視覚障害者による手技療法の普及支援

2013 年から 2016 年までの３年間、本校鍼灸手技療法科の実施した JICA 草の根支援型事業「インド共和国における視覚障害者の職業教育支援」は無事終了し、現在もインドのモデル校２校に於いて、本事業で養成したインド人教員達による視覚障害者への手技療法教育（日本でいうあん摩マッサージ指圧教育）が順調に実施されています。卒業生の職域開拓も、本校国際教育拠点係と現地の提携 NGO との共同作業により順調に進み、各地ホテルのマッサージルーム等で雇用されている他、2016 年８月には首都ニューデリー近郊の病院、Umkal Hospital 内に、インド初の視覚障害者による日本式手技療法治療院、"TALKING HANDS" がオープンしました。これは本校鍼灸科の国際教育拠点事業係の指導及び情報提供に基づき、現地の提携 NGO である NAB（National Association for the Blind）デリー支部が JICA 関連の出資団体の融資を受けて始めたものです。病院内の医師達の理解も得られ、２人の卒業生が通院患者の施術にあたっています。

これらの卒業生が２年間の日本式手技療法の教育を全て終了したことを証明する修了証は、現在もモデル校の卒業生達に対して本校鍼灸科国際教育拠点係を通して筑波大学教育局から発行されています。今年度も、西インド、アーメダバード校の８名、及び北インド、デラドゥーン校の６名の卒業生に対して、筑波大学教育長とインドの学校の責任者の連名で発行されました。インドの目指す、視覚障害者による日本式手技療法の全国展開と資格制度の確立までは、この修了証が卒業生達のあん摩マッサージ指圧師免許の代わりです。日本の大学から発行される修了証ということで信用性も高く、卒業生達もこの修了証が届くのを心待ちにしています。



インド国立視覚障害者施設 NIVH（National Institute for the Visually Handicapped）は今後、本校の JICA 事業によりもたらされたこの視覚障害者の新しい職域をインドに根付かせ、全国の盲学校に広めることを目標としており、それに向けて本校教員の長期派遣等の協力を要請してきています。今後も発展を続けるインドの視覚障害者職業教育を本校鍼灸科による国際教育拠点事業が支援していきます。

（文責：鍼灸手技療法科国際教育拠点事業係責任者　寺崎　直）

８．2016 年度　本校生徒・卒業生の国際大会での活躍

リオデジャネイロパラリンピックも無事に終わりました。

本校卒業生たちも水泳・ゴールボール・陸上（マラソン含む）に参加し、頑張ってきました。

アテネから　北京・ロンドンと連続で参加してきましたが　今回は残念ながら在学生と一緒の遠征にはなりませんでした。世界のレベルが上がり　学校のクラブの延長では難しく卒業後も練習を続け国内大会に参加し続けた一掴みの人が参加できました。2020 東京に向けて　また　国内もにぎやかになると思います。一人でも多くの学校関係者に関わって欲しいと願っています。



GB　天摩・若杉選手



水泳　小野選手



陸上　高田選手



マラソン　堀越選手



水泳　木村選手

本校卒業生の結果

木村敬一　（普通科卒）　競泳 50m 自由形　銀メダル、100m 平泳ぎ　銅メダル

100m バタフライ　銀メダル　100m 自由形　銅メダル　200m 個人メドレー４位入賞

小野智華子　（鍼灸科卒）　競泳 100m 背泳ぎ　決勝進出８位入賞、

高田千明　（中学部卒）　陸上競技 100m 走　予選 13 秒 48（日本新）　走り幅跳び８位入賞 4 m 45（日本新）

天摩由貴・若杉遥（普通科卒）　ゴールボール女子　決勝トーナメント進出

堀越信司・マラソン４位

（文責：体育科　寺西真人）







聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

1．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下「本校」）は、平成 20 年度から教育長裁量経費、グローバル化に資する事業の支援を受け、国際教育拠点事業に取り組み始めた。本校における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・台湾）との相互生徒訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。本校生徒が国際教育推進事業の経験により、聴覚障害者の中や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。すなわち聴覚障害者の中のトップリーダー育成に繋がることにもなる。またこのような国際教育推進事業を行っていることは保護者の期待にも応えられる。その他にも海外の教育機関との共同研究を通して、最新の指導法を開発し、聴覚障害幼児児童生徒への授業力の向上を目指すものである。

2．平成 28 年度の活動報告



（1）専攻科造形芸術科・ビジネス情報科生徒による台湾研修旅行

平成 28 年 12 月 12 日から 16 日に台湾研修旅行を実施した。オンライン交流でつながりのある國立臺南大學附屬啟聰學校、臺北市立啟聰學校の 2 校へ訪問交流を行った。また、国立故宮博物院の見学、ビジネス情報科による DFI 社の見学、造形芸術科による淡水における制作活動を行った。

（1）國立臺南大學附屬啟聰學校との交流

交流は、本校生徒と相手校の生徒が混ざり合って座り、お互いに教え合いながらアクセサリーの作成を行った。当初はお互い話すことは出来なかったが、時間とともに身振り手振りで理解し合いながら、お互いの手話を教え合い、少しずつコミュニケーションを成立させていた。

（2）臺北市立啟聰學校との交流

訪問時に両校の生徒からの発表の時間が設けられ、本校からの発表として「日本の音楽によるダンス」と「日本の風物詩の切り絵のパフォーマンス」を行った。また、両校からの記念品贈呈では、本校生徒から日本の伝統玩具などがパフォーマンス付きで贈られた。

（3）国立故宮博物院の見学

前述の教科連携による調査学習の中で学習した作品の実物を見学し、調査活動を行った。事前学習が深く行われたことにより、生徒たちは、ただの観光見学ではなく、生徒自身が習得した知識と情報と実物を照らし合わせて鑑賞ができたと思われる。

（4）ビジネス情報科による DFI 社の見学

マザーボードなどの英語による専門用語について事前に英語の時間に学習したことにより、製造ラインの説明で戸惑うことなく、より深い理解が出来た。事前の知識が特に海外での専門的な見学では必要になると思われる。このことは、生徒たちによる会社側への質問の質の良さにつながることになった。

（5）造形芸術科による淡水における制作活動

台湾での制作活動では、日本と違った環境の中で実際の風景を見ながらの制作は生徒にとって、大変刺激のあるものになった。生徒たちが制作した作品の中に現地において五感で味わったものが現れていると思われる。

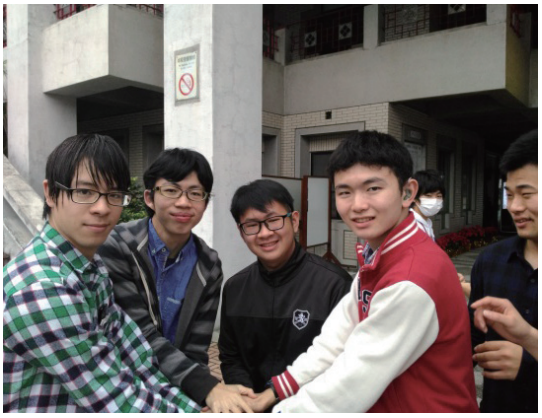
（6）今後の交流の継続性

今回、２校を訪問した中で、造形芸術科は、臺北市立啟聰學校とお互いの生徒たちの作品を交換し合い、本校で実施している作品展（卒展）で発表し合うことが合意された。

また、ビジネス情報科は、國立臺南大學附屬啟聰學校と日本と台湾の手話の違いの調査やお互いの手話動画を集め、ホームページの作成やデータベース化を行うことを合意した。今後、継続的に交流および研究を行っていく予定である。このことは、生徒たちに台湾と日本との友好関係の意識を育むことになると思われる。これは、国際理解教育につながるものである。









※　国際的資質・国際交流への意識調査と今後の課題

今回の交流や訪問を通して、生徒の海外への意識や国際交流に対する意識が、台湾訪問前後でどのように変容したか、また今後の課題について台湾の生徒とも比較しながら調査を行った。

（1）調査方法

調査対象は本校専攻科造形芸術科・ビジネス情報科全生徒（14 名）、國立臺南大學附屬啟聰學校生徒（26 名）である。台湾訪問の前後でアンケートを実施した（國立臺南大學附屬啟聰學校でのアンケートは本校で実施した質問を翻訳したもので実施した）。また、本校専攻科生徒のみ、台湾訪問を通して体験できたことに関するアンケートを訪問後に実施した（研究発表会当日にスライドにて発表する）。

（2）質問項目について

質問項目は「国際的資質を問うアンケート」より抽出した項目により作成した。尺度の評定には５件法を用いた。

No.	質問項目
1	外国人とはあまり話したくない
2	多くの外国人と友達になりたいと思う
3	今後、さまざまな国の言葉を学ぶ気はない
4	言葉を交わさなくても相手の気持ちが分かる
5	世界平和の維持に関心がない
6	自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できる
7	将来、同僚として外国人と仕事をしたい
8	英語以外の外国語を学びたい
9	同年齢の外国人が話せる程度に自分も英語を話せるようになりたい
10	海外経験を経て、日本にいる外国人に話しかけやすくなった（海外に行ったことがない＝１）

なお各質問は「国際的資質を問うアンケート」による大項目に則り区分すると次のように区分される。

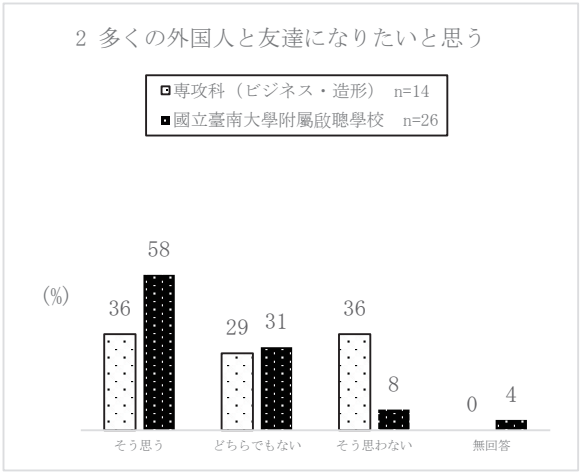
大分類	設問	設問
１．異文化理解	No.1 外国人とはあまり話したくない	No.2 多くの外国人と友達になりたいと思う
２．コミュニケーション能力	No.3 今後、さまざまな国の言葉を学ぶ気はない	No.4 言葉を交わさなくても相手の気持ちが分かる
３．他者との共同での問題解決能力	No.5 世界平和の維持に関心がない	N0.6 自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できる
４．海外国際的交流（言語的意欲）	No.8 英語以外の外国語を学びたい	No.9 同年齢の外国人が話せる程度に自分も英語を話せるようになりたい
５．海外国際的交流（親密性）	No.7 将来、同僚として外国人と仕事がしたい	N0.10 海外経験を経て、日本にいる外国人に話しかけやすくなった（海外に行ったことない＝１）

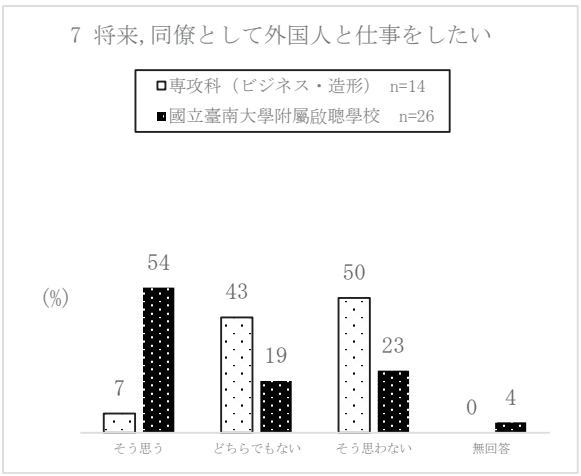
（3）結果

分析前に回答の尺度を合わせるため設問中の逆転項目（No.1、3、5）の逆転処理を行った。また、選択肢１・２の合計を「そう思わない」３を「どちらでもない」、選択肢４・５の合計を「そう思う」、回答なしを「無回答」とした上で、結果の分析を行った。

① プレアンケートにおける専攻科と國立臺南大學附屬啟聰學校の比較

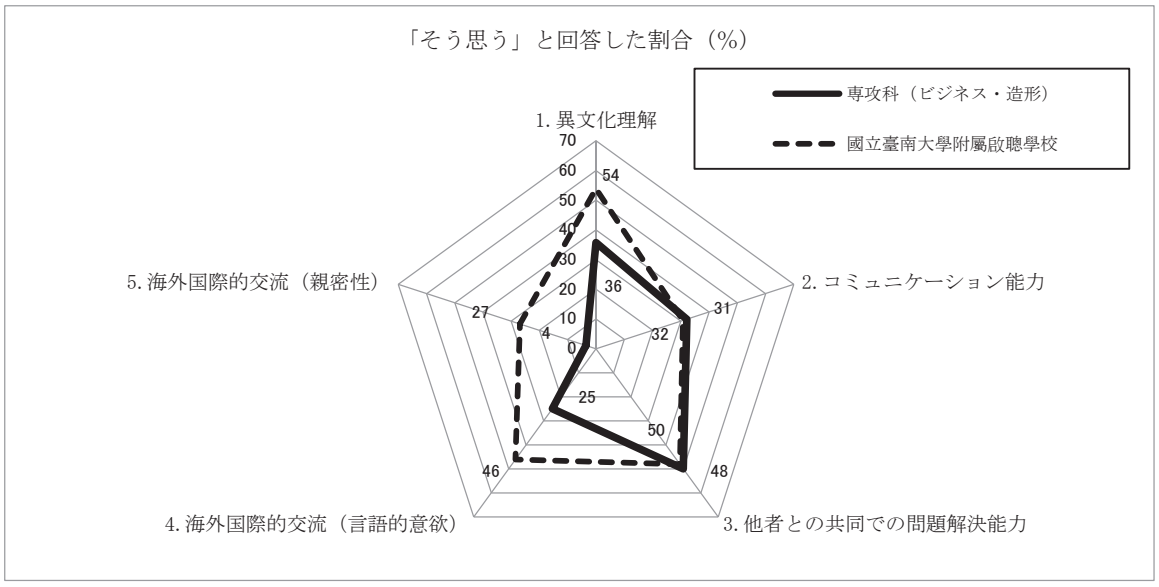
χ^2 検定を用いて結果を検定すると、二校間で危険率１％の範囲で有意差が認められたのは質問No.2、７であった。





國立臺南大學附屬啟聰學校ではポジティブな回答が過半数であるのに対し、専攻科の回答は、どちらでもない／そう思わないというネガティブな意見が占める結果となった。

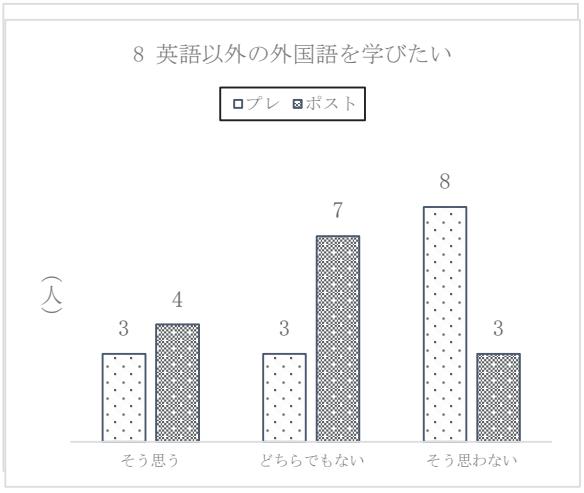
次に「そう思う」と回答した割合を大項目で比較を行った。

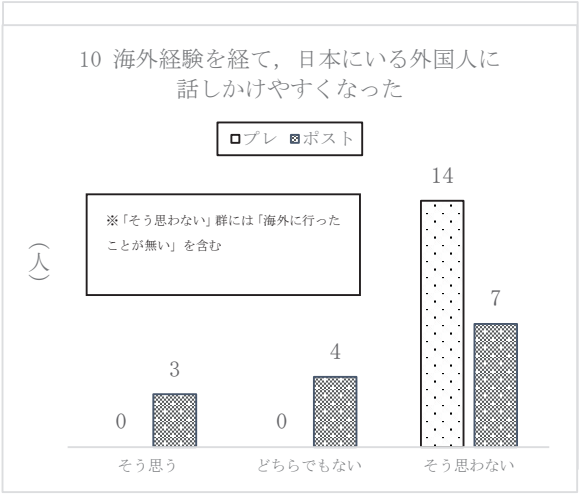


異文化理解、海外国際交流（言語的意欲・親密性）の項目において本校専攻科は國立臺南大學附屬啟聰學校の結果と比較して消極的であり、特に海外国際交流（親密性）に関して非常に消極的という結果であった。コミュニケーション能力、他者との共同での問題解決能力に関しては同程度であった。

② 専攻科における台湾訪問前後の比較

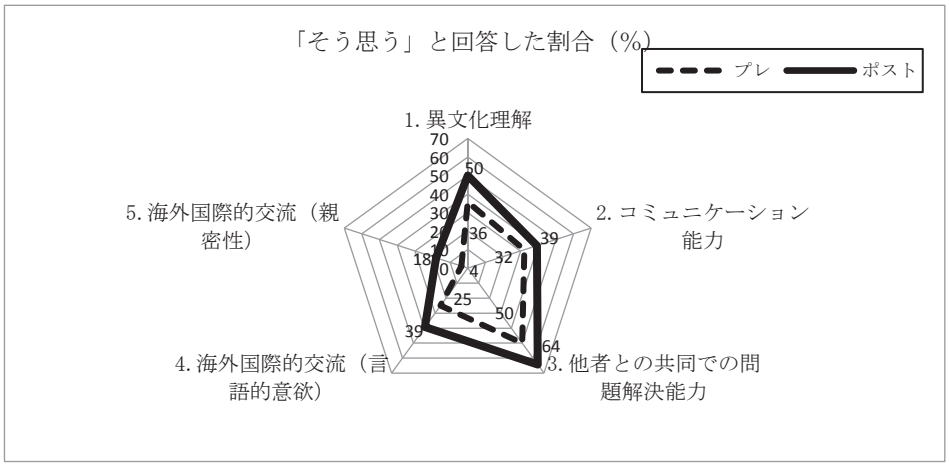
χ^2 検定を用いて検定した結果、プレ・ポストで危険率１％の範囲で有意差が認められたのは質問No.2、3、8、10であった。（無回答なし）





プレアンケートでネガティブな回答であった群がポジティブな回答へ推移した。

次に「そう思う」と回答した割合を大項目に沿って比較を行った。

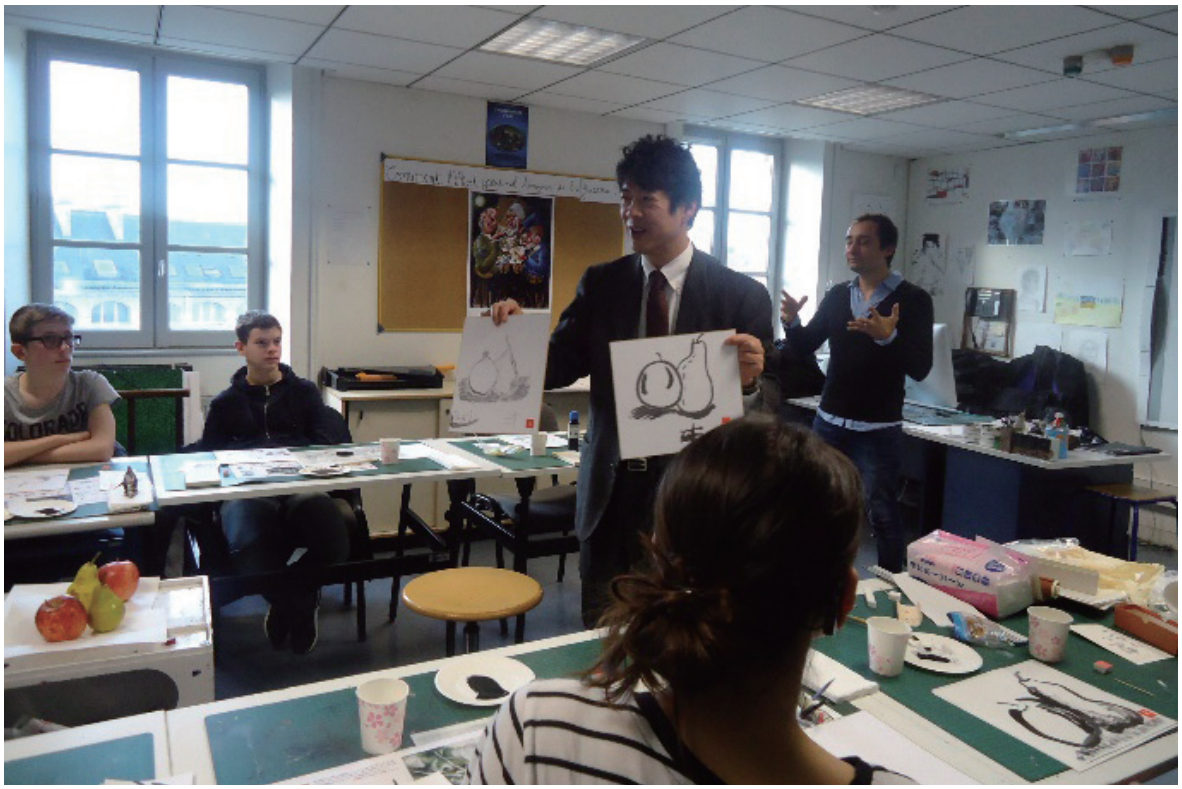


全ての項目で台湾訪問後に生徒の意欲の向上が見られた。特に国際交流意欲や、外国の人たちとのコミュニケーションに対しての意欲が向上していた。しかしながら全体としては半数程度にとどまっており、今後さらに国際交流の意識を高めるための工夫が必要である。

３．まとめ

海外や国際交流への意識に関するアンケートの結果から、次のようなことが明確になった。これまでオンライン交流等で海外との交流を行ってきたが、実際に相手国に行って、交流を行ったことで、一気に海外への意識等も高まり、国際的資質の大きな向上に繋がったということである。

今後、さらに生徒の国際的資質を高めるには、どんな経験を海外で行えば、どんな国際的資質が向上するかを明らかにして、より目的に繋がる交流プログラムを両校の綿密な協議の上に作っていく必要がある。また、そのプログラムにも繋がる形で通年行っているイングリッシュルームの活動が展開できればと思う。さらに財政的な努力として、附属校単位でも科学研究費をはじめとした外部資金の積極的な獲得を目指す必要があると考える。



（２）フランス国立パリ聾学校との教員相互訪問交流教育の推進事業





パリ聾学校との相互訪問交流（12 月 4 日～ 9 日）

・姉妹校締結を行っている国立パリ聾学校との交流事業は、本年度安全面を考慮し、教員のみの渡仏になった。今回は教育長裁量経費・筑波大学グローバルコモンズからの支援もいただき、パリ聾学校での本校校長・主幹教諭の授業実施等新たなる事業も開始した。文化交流授業（美術・水墨画）を行い、パリ聾学校生徒・教員か絶賛の評価をいただいた。

・また本校教員が渡仏中、オンラインによる生徒同士の交流も実施した。

（文責：教務主任　山本　晃）

附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告

１．本校の国際教育の特徴

本年度、附属大塚特別支援学校は、以下の国際教育に関する取り組みを行った。
①小学部低学年における国際理解教育の実践
②中学部における国際教育の実践
③高等部における国際教育の実践
それぞれの活動について以下に報告する。

２．活動の実際

１）小学部低学年における国際教育の実践

本校では国際理解教育に重点をおいた教育活動が行われている。文部科学省は、国際理解教育の推進について「国際社会においては、子どもたちが日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成すること」、そして「我が国の歴史や文化、伝統などに対する理解を深め、これらを愛する心を育成するとともに、広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくための資質や能力を育成すること」が重要であり、「こうした観点から、現在、各学校において、社会科などの各教科、道徳、特別活動や総合的な学習の時間を通じて国際理解教育」が行われていると述べており、例えば、「地域に住む外国人から、その国の郷土料理や民族舞踊などを教わり、それを体験し、料理の由来や踊りに込められた願いなどを学習することで異文化に対する理解を深めるなどの活動」があると説明されている（文部科学省、2006）。

本校でもこのような理解に立って国際理解教育を推進し、小学部各学年の実態に応じた取り組みをしているが、とくに低学年においては文化や習慣、願いといった抽象的な概念を理解することの難しさから、児童が主体的に学習活動に取り組んでいく点において大きな課題があると言える。

本実践では、この課題に迫り、小学部の低学年の児童が主体的に取り組める活動プログラムの開発を目標として行った２つの実践を紹介する。

（１）生活単元学習「せかいのあそび」の取り組み

小学部低学年の学級（小学部１・２年。以下、はな組）では、児童の発達段階や学習経験などの実態と、興味関心の持ちやすさを考え、「あそび」を題材として取り上げた。世界の国々にはその国の歴史と文化が反映された「あそび」があり、中には国を超えても子どもが楽しんで取り組める要素が含まれていのではないかと考えた。そこで、書籍やインターネットのウェブサイトの他、小学校などで取り組まれている事例や本校の職員や保護者、本校に関わる留学生などに協力してもらいながら、情報収集を行い、単元化に取り組んだ。そのうち、２つの活動を紹介する。

①ジェンズ（中国のあそび）

・教材開発の過程

ジェンズ（毽子）は中国およびその周辺地域で行われている羽根蹴りゲームの羽根である。ジェンズを蹴ることを踢毽（ティージェン）という。重りに羽根が付いたシャトルの形状をしており、それを蹴り上げる遊びである。そのため、キックシャトルとも呼ばれる。実際のジェンズを何度も足で蹴り挙げるのは、大人でも決して簡単ではないため、児童の運動能力と、ジェンズ本来のもつ動きの面白さを両立させるため、風船にポリエチレンテープで作った羽根を取り付けた「風船ジェンズ」を新たに開発し実践に使用した。さらにそれを天井からつり下げた。

・授業実践の取り組み


風船ジェンズ

授業では、１回目に天井からつり下げた「風船ジェンズ」を児童が一人ずつ蹴って遊んだ。障害の特性上股関節や足腰が弱く、片足立ちが苦手な児童がいるが、風船ジェンズがあることで自然に児童の動きが誘発され、体のバランスの取り方を覚えていく可能性があることも示唆された。

次に、「はらっぱたんけんたい」という児童同士の関わりを育てる授業に導入し、「みんなでキック」をおこなった。手をつないで輪になり、歌に合わせて一人ずつ順番にジェンズを蹴り上げる活動である。ここでも、友達がジェンズを蹴り、「次は○○さんの番」といったように、順番や見通しの理解を促す上でも有効な教材であることが示唆された。


風船ジェンズの練習


風船ジェンズの練習


「みんなでキック」の活動

②ペタンク（フランスのあそび）

・教材開発の過程

ペタンクはフランスが起源のゲーム（スポーツ）と言われており、現在でもフランスでさかんに行われているほか、国際的にはスポールブールとも呼ばれ、さまざまな国で取り組まれている国際的なスポーツとなっている。ペタンクは実際の体育用の道具を使って取り組んだ。本来は、ビュットと呼ばれる目標球に近づくようにブールと呼ばれる球を投げて点数を競うゲームであるが、はな組では、小型のフラフープを目標とし、そのフラフープの中に投げたブールが入ることで得点を競うルールを新たに考案し、取り組んだ。


ペタンクの投球練習

・授業実践の取り組み

授業では、１回目にフラフープを床に固定し、球を転がしてフラフープの中に入れる練習をした。２cm ほどあるフラフープの厚みを越えるのが難しく何度もやり直すうちに、力加減を覚えて少しずつ得点できるようになった。ペタンクの球は 700g ほどの重さがあり、球を握ることや腕を振ろうとする動きを誘発する点で効果のある道具であることが示唆された。

次に、保護者参観日に合わせて授業を行い、児童チーム対保護者チームでの対戦式のゲームを行った。一人が２球ずつ投げ、得点を競った。事前に保護者にも、手加減をせず、一生懸命プレイするよう依頼した。結果は僅差で保護者チームが勝ったが、児童は自分が得点した時はもちろんのこと、自分の親や他の保護者が得点した時も同様に喜ぶ姿が見られた。

（２）ＪＩＣＡアフリカ・オセアニア研修における「音楽」の授業

①交流のための授業づくりの過程

今年度、はな組では、音楽を生かした「ふれあいあそび」や「やりとりあそび」を中心とした、授業を多く行っている。子どもの実態から、触れ合うことで感じる安心感や、触覚や運動感覚を通して相手と心地よさを共有できることを大切にしたいと考えた。１、２学期の取り組みを通して、安心感が育まれ、教師や友達との関わりが深まりつつある状況だった。

音楽の授業では、自作の歌を用いて、児童に呼びかけたり、友達と触れ合ったり、簡単な動きを入れた遊びをしたりする活動を行った。使用楽器も、柔らかい音色の物（ウクレレ・カリンバなど）を選び、心地よさを味わえるようにした。

ウクレレは、相手の側に行ったり、歩き回ったりしながら演奏できるので、児童が注目しやすく、教師も集団の中に入り、動きに合わせて関わりを深めることができた。また、カリンバを使って、

「せなかにおはなし」という「ふれあいあそび」を考案した。カリンバの音色や音階を生かし、語りかける声に近い表現で歌うことができる曲にした。児童もすぐに覚えて、手や顔を相手の背中に付けて、心地よさや楽しさを味わっていた。これらの曲は、生活の授業でも使用し、教師や友達との関わりを深める活動を行ってきた。

今回の交流も、このような音楽の流れで、いつものように触れ合い、初めての方とも関わることができるような授業を構成した。アフリカから来日した研修生もいるので、「せなかにおはなし」の他に、アフリカの楽器カリンバの曲を用意し、みんなで踊る活動を考えた。

②授業実践の実際





授業では、JICA の研修員にも、触れ合ったり動いたりすることで関わりを深めて欲しいと考え、参加型の授業にした。あいさつの歌「みんなでたのしく」では、教師の次に児童がボールを渡すなどして、相手とやり取りをしているが、いつもリーダーとして取り組んでいる児童が、恥ずかしさのあまり躊躇したため、他の児童が実施した。恥ずかしいという気持ちもその場で共有しながら、研修員も温かく見守ってくれた。役割を担った児童は、張り切って研修員に対応し、名札を見て、「名前がほぼ同じ！」と、ある研修員に声を掛けられ、嬉しそうにしていた。名札は、ローマ字で書き、児童にも付けていたが、外国の方がいるという雰囲気を感じ、張り切っている様子も見られた。

「せなかにおはなし」では、自分の背中を触られている手に注目し、手の平と甲の色が違うことに気がついた児童がいて、とても感動的な場面だった。





手のひらと甲の色の違いに気づいたＡさん

普段の授業でも、相手との距離感が縮まり、関わりを深めることができる曲だが、初めて会った各国の方々と自然に関わり、笑顔が見られた。他に、生活の授業や大塚祭で取り組んでいた「はないちもんめ」を日本の遊びとして紹介し、一緒に活動した。

最後は、「子どものうた」（カリンバ奏者・コイケ龍一、作詞・作曲）で、自由に踊った。児童も、乗りやすく、自然に跳んだり揺れたりする曲だった。マラカスなどの小楽器を、一緒に振りながら同じ輪の中で踊ることができた。最初の場面で、恥ずかしがっていた児童も、大勢の輪の中で楽しそうに踊っていた。

今回の交流では、音楽の持つリズムや雰囲気で、それぞれの感覚や情動などに働きかけ、コミュニケーションを深めることができたと思う。児童にとっては、初めて会う外国の方と、とても近くで交流することができ、貴重な体験になった。私達も、言葉で話さなくても感じ合うことができ、子どもも大人も親しみを持って関わることができたことが大変嬉しく、大きな成果であった。

③研修員（アフリカ・オセアニア教育関係者）の関わり面から

特別支援教育研究センターでは、独立行政法人国際協力機構（JICA）と共に開発途上国への国際協力及び支援として、南米諸国、アフリカ諸国、モンゴルからの特別支援教育に携わる研修員を受け入れてきた。本年度はアフリカ・大洋州から６カ国、11名の研修員を受け入れて研修をおこなった。

本校でのJICA研修では、２つの授業参観をおこない、その１つがはな組の「音楽」の授業であった。本授業は研修員が参加する形で参観をおこない、音楽に合わせて児童と研修員は共に踊ったり、触れ合ったり、交流を深めた。当初研修員は照れている様子であったが徐々に慣れて児童に積極的に関わるようになった。中には、児童の名札を見て、名前を覚える研修員の姿もあった。講義や参観を中心とした研修が続く中で、子どもと触れ合ったことで研修員の表情は和み、笑顔の多い授業参観となった。参観した感想として「ダンス等実際に子ども達と一緒に体を動かすことができ楽しく内容を理解することができた」、「教材の工夫や児童・生徒への支援方法がとても参考になった」、「先生方がとてもエネルギッシュで楽しい授業だった」等があった。

本授業は「音楽」だけでなく、言語の異なる相手と音楽を通してコミュニケーションを図るインクルーシブ教育にも参考となる授業であったと思う。インクルーシブ教育はJICA研修員の関心が高い実践であることから、音楽あるいは音楽を通した教育実践を報告することは国内だけでなく海外にも需要があると感じた。

（３）まとめ

以上、２つの実践について報告をしてきた。「せかいのあそび」を通して、各国には独自の楽しい遊びがあることがわかった。そして、優れた遊びには、子どもの活動を誘発する道具があり、将来のスポーツに通じる体の動きを獲得する要素が含まれていることがわかった。また、「音楽」を通して、「私と違うあなた」という他者の違いを学ぶ機会と、「同じことができる」「ここが似ている」という共通点を学ぶ機会が織り込まれることが学びを豊かにする可能性が示唆された。

〈参考文献等〉

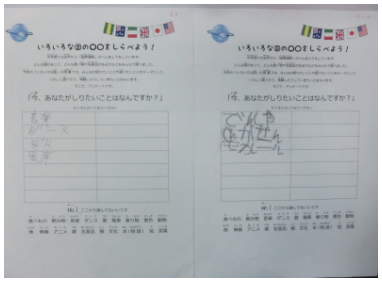
文部科学省（2006）『平成18年度 文部科学白書』
コイケ龍一作詞・作曲（2009）子どものうた、『森あそび』（CD）

（文責：田上幸太、小家千津子、飯島　徹、阿部　崇）

２）中学部における国際教育の実践

中学部では、『みんなでいっしょに世界旅行！～調べて、体験して、発表しよう！～』と題した生活単元学習を、１年間を通して実施した。世界には、生徒たちが興味を持ち、『知りたい』『やってみたい』と思う事柄がたくさんある。世界の様々な事柄を学習の題材とし生徒の主体的な学習参加を促すことで、生徒たちがやりたいことを自己決定したり、自分の気持ちを他者に伝えたりすることができるのではないかと考えた。また、学習を進めることで好きな分野に対する興味関心をより深めたり、新しい分野へと興味関心を拡げたりすることをねらった。それぞれの生徒の学びへの意欲を引き出し、興味関心の幅を拡げるための設定として、事前に生徒に対して事前にアンケート調査を行い、現在の興味関心のある分野の調査を行った。アンケートの回答を集約し大きくジャンル分けをした結果、①鉄道②音楽ダンス③生き物④食べ物⑤物語のテーマが挙げられた。よって、本単元では、「ヨーロッパ」「南北アメリカ」「アフリカ」「オセアニア」「アジア」の５つの大陸を舞台に、生徒の興味関心の高い５つをテーマにした授業を実施することにした。







本単元の学習は、①やりたいテーマを選択すること（選択）、②友達と協力してテーマについて調べること（調べ学習）、③調べ学習で興味をもった内容を体験すること（体験）、④学部の仲間の前で発表会をすること（発表）の４つよりなる。選択では、５つのテーマの中から自分が調べたり体験したりしたいことを選択する。その後、同じ選択をした生徒たちでグループを作り、「調べ学習」「体験」「発表」を行った。５つの大陸を巡るため、５回の選択の機会が設けられていた。「アメリカのハンバーグが食べたい」「オーストラリアを走る鉄道を調べてみたい」「アジアのダンスを踊ってみたい」など生徒たちは世界の題材に興味を持ち、自分の意思で選択をすることができた。





「調べ学習」では、各テーマの中から特に興味をもったことを選択し、それについて本やパソコンを用いて詳しく調べた。友達と協力したり譲り合ったりしながら、世界の事柄に関心を持ち、積極的に調べ学習を進める様子がみられた。興味関心をさらに深め拡げるとともに、グループの仲間関係の深まりをみることができた。

「体験」では、「調べ学習」で興味を持った事柄を取り上げ実際に体験した。世界の食べ物を食したり、世界の鉄道の車掌になりきったり、世界の楽器を鳴らしたりするなど、生徒の実態や興味関心を加味した上で多様な体験を取り入れた。生徒たちは、魅力的な体験をグループの仲間と共有することで、テーマについてさらに興味関心を深めていった。





「発表」では、「調べ学習」や「体験」で学習してきたことを他のグループの友達に発表した。生徒たちは、自信をもって発表会に参加し興味関心をさらに深めているようであった。また、発表を聴いている観衆からは、「すごい」「やってみたい」といった声も上がり、新しい分野への興味関心の拡がりもみられた。発表会の後、次の大陸で学ぶテーマの「選択」を行い、新しいグループで学びを深めた。





単元の最後には、『振り返り編』として、「みんなで様々なテーマの世界を巡ろう」を実施した。これまでは、生徒自身の興味関心に応じてテーマを選択してきたため、好きなことに対する興味関心を

深めることができた生徒が多くいた一方で、興味関心の拡がりがあまりみられない生徒もいた。興味関心が異なる友達と一緒にチームを組み、「大塚パスポート」を持って移動し、テーマごとに設定されたミッションをクリアしながら世界を巡ることで、様々なテーマの体験をしながら興味関心を拡げることができることに加え、得意なテーマのミッションで活躍することで自他の違いを知ることにつながると考えた。





新たな仲間とミッションに挑戦することで仲間関係を育むとともに、新しい分野を体験することで新しいテーマに興味関心を拡げる生徒が多くいた。「今年度は鉄道グループばかりだったけど、来年度は食べ物グループもやってみたい」と来年の学びを楽しみにしている生徒もいた。世界の物事に少しずつ興味関心を拡げる生徒たちの姿があった。

（文責：深津達也）

3）高等部における国際教育の実践

（1）交流を通した「国際理解学習」と「協同学習」

オリンピック・パラリンピック学習に取り組む高等部では、「総合的な学習の時間」において、単元「世界の中の日本～様々な国の文化を探れ！大塚新聞編集部！」を計画した。高等部の国際理解学習は、①様々な国の自然・文化・産業などを知り、興味・関心を持つ。②多様な民族・文化・産業などがあることを学び、日本と世界の国々の違いについて考える。③世界の国々についての学習を深め、興味・関心を世界に広げる。以上の３つの目標を掲げている。一方でこの単元では、日本と世界の国々のことについて「調べる学習」、「まとめる学習」、「発表する学習」の経験を通して、生徒同士が支え合い、認め合いながら互いを尊重し、自信をもって学習に向かう生徒の姿を願い、協力し合いながら共通テーマの学びを深める「協同学習」を展開した。

この単元は、国際理解を学習の題材にするが、単元の目標としては、グループワークによる「協同学習」を通して、自己と他者の「同じ」と「違い」を見つけ、互いに共感したり、尊重し合ったりしながら目標に向かって協力することを目指した。その姿は、身近な「私とあなた」という関係の理解から民族の違いの理解、自国と他国の関係の理解へとつながってくれることを願った。また、「発表する学習」では、自分の意思やグループでまとめたこと、考えたことについて発表する経験によって生徒の自己理解や意思表明の力を育つと考えた。さらに諸外国の文化の学習で得られた新しい知識を互いに発表し合う中で他者に認められる経験が豊かな自尊感情を育むと考えた。




高等部の「協同学習」では、学習の振り返りも大切にしている。一人一人に役割を設定し、個々の学習成果を相互に評価することで「私とあなた」の良いところを見つけ合う評価活動を通して、自尊感情

の育ちを支援した。こうした、個々の力を発揮する機会と、それを評価される機会がある「協同学習」は、生徒同士がポジティブに共通の目標に向かう姿勢の中で互いの育ちを支えると考えたい。

（2）TIAS アカデミックスタッフや留学生の出身国を調べる学習

今年度、高等部では筑波大学「つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）」に所属する留学生との交流し、留学生の出身国の文化について調べたことを発表したり、スポーツ交流したりする経験を通して国際理解を深める企画を学期毎に企画した。１学期末に行った第１弾の交流会では、TIAS のアカデミックスタッフとして学生を指導するインド出身の筑波大学体育系ランディープ・ラクワール教授と筑波大学でヨーガコースの授業を担当する高橋玄朴先生をお招きした。生徒は交流会に向けてインドの「くらし（衣装、食事、住居、町並み、言葉、学校、日用品、宗教）」、「楽しむ（音楽、芸術、映画、スポーツ、健康）」、「歴史・自然・文化遺産」の３つのカテゴリーの中から興味あることについて調べて記事をまとめ、壁新聞作りを行った。調べ学習は、タブレット端末を使った Web 検索やブリタニカ国際百科事典（ロゴヴィスタ社アプリ）、書籍等を使って進めていった。交流会当日、第１部ではヨーガ教室、第２部で壁新聞の発表会を行った。学習発表は、編集長（班長）が中心となって進行し、各グループが調べたことを整理しながらわかりやすく発表する姿や、先輩後輩同士で助け合う姿が見られ、高等部らしい生徒達のまとまりが感じられた。また発表形式は、個々に応じて音声ペン（Gridmark 社）やタブレット端末を使い、どの生徒でも発表できるように工夫した。







２学期の単元では、３人の留学生との交流に向けた調べ学習を行った。３つの縦割りグループが、それぞれ南米のコロンビア、アフリカのガーナ、ヨーロッパのハンガリーについて、国旗や国章、首都、人口、面積などの基本データをはじめ、様々な文化について調べて壁新聞を作った。タブレット端末を使って調べることに慣れてきた生徒達は、グループリーダーを中心に情報を整理し、必要な情報を選択したり、役割を明確にしながら編集作業を進めたりする姿が見られるようになった。



交流会では、オリンピック・パラリンピック教育をはじめ、スポーツマネジメントやティーチング・コーチングを学ぶ TIAS の学生とアダプテッドスポーツによる交流を行った。英語のスピーチを交え、ICT 機器を活用しながら堂々と発表する姿や、片言の英語や身振り手ぶりを使って積極的にコミュニケーションする生徒の姿が印象的であった。



３学期は、自国の文化を TIAS の学生に紹介する単元を計画し、「協同学習」を通した調べ学習を展

開した。高等部の「協同学習」では、縦割りのグループ学習の中にリーダー的役割を担う生徒を配置し、各グループを代表した編集会議を設定した。多様な教育的ニーズを有する本校高等部の集団のなかで、リーダーとしての自覚が育ち、互いに支え合いながら授業を展開する様子が見られるようになった



（3）国際理解を題材にした学びの意欲へ

今回の単元のように、自分たちが学習した国の人と実際に関わる機会を設定することは、知的障害のある生徒達が学んだ知識をいかす上でとても貴重な学習経験であると考える。生徒達は、この単元の中で新しい知識を得ることの楽しさを知る経験によって、もっと知りたい、学びたいという気持ちが芽生えており、知的障害児教育におけるオリンピック・パラリンピック教育で大切なことは、そうした生徒の「学びの意欲」を育むことではないかと考えたい。

（文責：中村　晋）

附属桐が丘特別支援学校

積極的にコミュニケーションを図る態度と、自己発信力を育む桐が丘

１．本校の国際教育の特徴

国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育は、これまで国際交流協定を締結している韓国・セロム学校との交流を中心に取り組んできた。韓国に児童生徒の代表が赴き、セロム学校の児童生徒との交流活動や公共交通機関の利用体験などを通じ、韓国社会の様子やバリアフリー環境、異文化を体験してきた。帰国した代表児童生徒は代々自己の体験を報告し、国際交流体験は広く校内で共有されてきた。近年は、外国人研修生や留学生と交流する機会も充実し、児童生徒の挨拶や交流活動時の物怖じしない様子に、国際教育の取り組みが徐々に浸透し、本校が掲げる目標の実現に着実に向かっている手応えを感じ取ることができる。

今年度は、台湾交流において昨年度の国立和美実験学校に加え、新たに国立南投特殊教育学校も加え、２校を訪問することができ、正式に国際交流協定を締結した。

また、2020 年に行われる東京オリンピック・パラリンピックが徐々に児童生徒に意識され始めており、外国人に積極的に接し、コミュニケーション力を高めようとする気運が高まりつつある。

２．活動報告

（1）大韓民国　セロム学校訪問

期　日：平成 28 年 11 月８日～ 10 日

参加者：児童生徒２名【小学部６年男子１名、中学部１年男子１名】

引率教員３名【副校長、小中各学部より教員各１名】



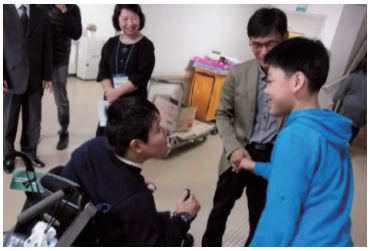
平成 28 年 11 月９日、小学部１名、中学部１名、合計２名の代表児童生徒が韓国・セロム学校を訪問した。歓迎会では、小学部の児童は簡単な韓国語の挨拶と英語で自己紹介を行った。中学部の生徒は、スライドを用いて英語で自己紹介や桐が丘の学校紹介、クラスメイトの紹介を行った。また、前回にセロム学校を訪問した生徒による韓国語でのビデオレターを視聴した。それぞれの思いのこもったプレゼンテーションに、たくさんの拍手をいただくことができた。歓迎会の後、代表の児童生徒は音楽や体育の授業に参加したり、セロム学校の代表生徒と給食を食べたりして交流活動を行った。セ

ロム学校の代表生徒の中には少し日本語が話せる生徒もいて、通訳がいない中でも児童生徒だけでコミュニケーションをとることができた。

セロム学校訪問を終えた後は、韓国民俗村を見学し、朝鮮王朝時代の伝統家屋を見て当時の生活文化について学んだ。また、民具や農機具の使い方も体験した。翌日は、景福宮や南大門市場などソウル市内を散策し、韓国の歴史や文化、現代の暮らしぶりを学んだ。

セロム学校訪問は今回で８回目を迎えることができた。廊下で声をかけてもらったり、顔見知りの教員や生徒が増えたり、交流の実績が蓄積されてきていることを肌で感じることができた。時間をかけて交流を継続し、そのかかわりを深めていくことの大切さを改めて考えることができた今回の訪問であった。





以下に代表児童生徒の感想を抜粋する。小学生はことばだけではなく身ぶり、手ぶりを交えてコミュニケーションを取ることができうれしかったと述べている。中学生は、韓国の食文化に触れたことで世界の食文化をもっと学びたいという意欲が高まったことについて述べた。児童生徒２名は、訪問後に他の児童生徒に自分の経験や感じたことを伝える役割も担っている。実際に訪問できる人数には限りがあるが、報告を聞くことで他の児童生徒もこういった経験や思いを共有することができている。

・最初はどういう風に交流しようかなと考えていたことが、実際に交流をしてみると緊張してとまどった。質問は初対面だったので、緊張してあまりできなかったが、だんだんと「日本語」「英語」「韓国語」を使ったり、身ぶり、手ぶりでコミュニケーションをとれるようになった。とてもうれしかった。（小６男子）

・韓国料理を実際に食べてみて、本場のキムチやコチュジャンが思っていたよりも辛く、日本のキムチやコチュジャンが日本の人の口に合わせて甘く作られていることに気づきました。ある程度辛いことは知っていましたが、どの程度辛いのかは、実際に韓国の市場に行って食べてみなければわかりませんでした。このことから百聞は一見に如かずということわざは正しいということがわかりました。韓国の食文化に触れてみて、実際に世界を旅して、その土地の伝統料理を食べてみたいと思うようになりました。（中２男子）

（2）台湾　国立和美実験学校・国立南投特殊教育学校訪問

昨年度、国際交流協定締結について相談することを目的に訪問した国立和美実験学校に加え、今年度は国立南投特殊教育学校の２校を訪問して、両校ともに国際交流協定を締結した。

期　日：平成 28 年 11 月 23 日～ 26 日（24 日に南投特殊教育学校、25 日に和美実験学校）

参加者：生徒２名【高等部２年女子】
　　教員４名【校長、教員３名】

南投特殊教育学校は、主として知的障害のある児童生徒を対象とする学校である。しかし、肢体不自由を併せ有する児童生徒も在籍しており、障害の程度が重度である者を対象に、校内で理学療法や作業療法が行われている。学級編制は、現在、小学部２学級、中学部２学級、高等部６学級の計 10 学級で、将来的には 12 学級編制になる予定である。児童生徒数の規模に比べ、校舎は大変大きく設備も充実している。高等部は職業訓練が中心で、清掃、園芸、ケータリング、軽作業等の授業がある。

学校紹介、国際交流協定の調印式を行った後に、生徒同士が交流を行った。最初に参加したクラスでは、本校生徒が一人ずつ日本文化紹介のスピーチを英語で行った。それぞれが興味のある分野を選び、一人はアイドルについて、もう一人はアニメについて紹介した。南投の生徒も興味を持ったようで、スクリーンに映した画像まで直接指をさしに来るといった反応を得ることができ、本校生徒も喜んでいた。その次に参加したクラスでは、一緒に作業実習を体験した。ゴムシートからリング状に象られた部分を切り取る作業で、細かい指の動きが必要となるため本校生徒は苦労していたが、南投の生徒や先生方と速さを競いながら楽しく交流を深めることができた。その後は、校内見学をする中で、訓練機器を本校生徒も直接使わせてもらうことができた。台湾の学校の設備が充実していることに驚くとともに、介助の方法についても本校や日本との違いを学ぶことができた。


調印式


作業実習体験


視線運動訓練機器体験


英語で日本文化「アイドル」紹介

和美実験学校は、昨年度に初めて代表生徒を連れて訪問し、今年度は正式に国際交流協定を締結した。調印式には和美の代表生徒も参加したため、ここで短時間ではあるが生徒同士で会話をすることができた。もともと和美実験学校訪問ではスピーチや発表を行う予定はなく、英語で会話をする準備はしていなかったが、前日に南投特殊教育学校でスピーチした内容を活かし、日本のアイドルやアニメについて聞くことができたようである。海外で臨機応変に対応する本校の生徒の姿に、コミュニケーション能力や国際的な力が育っていることを感じ取れた。

校内見学では、前日に引き続き台湾の学校の充実した設備に驚きながらも、冷静にメモをとったり写真を撮ったりしていた。前日はただ話を聞くだけだったが、その反省を生かして主体的に行動できていた。



調印式



図書室の車いす席を撮影する生徒

昨年度は、生徒同士の交流時間を確保することが課題として残ったが、今年はその点を改善することができた。来年度以降は、調印式がなくなる分を交流の時間に充てられるので、より親交を深められることが期待される。

（3）高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

平成 28 年 12 月 13 日、高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。留学生との交流は、今年度で 11 年目となる。前年度に引き続き、「自国の文化や環境を見直すとともに、他国について調べ理解しようとすることで、様々な人々が多様な環境のもとで文化を育んできたことを学び、視野を広げる」こと、「様々な手段で意思疎通を図ろうとする体験を通して、言語の異なる他者とのコミュニケーションに対する積極性を養う」ことを目的とした学習を行った。

今年度は、インドネシア、フィリピン、ブラジル、ホンジュラス、メキシコ、ガボン、南スーダンの７か国８名の留学生と交流を行った。留学生との交流の事前に行われた学習では、上記の目的を基に、国際交流委員の生徒を中心にテレビ会議システムを利用して打ち合わせを行い、お互いに当日どのような内容で交流を行うか意見交換を行った。打ち合わせで挙がった留学生の要望を踏まえ、肢体不自由校ならではの授業や日常の様子を知っていただければと、生徒中心となって企画を立てた。また、英語での言い方や説明する際に必要であれば画像等の補足的資料について確認した。

当日、留学生の方々は午前中授業見学をし、昼食は学年ごとに分かれ給食を共にした。そこで自己紹介をし、母国の文化について伺うなどした。午後の交流会開会式では、国際交流委員が司会を担当し、挨拶を英語で行った。留学生からは、母国の言葉で挨拶して頂き、自国の紹介を多様多彩な写真を交えながら説明して頂いた。特に伝統的な衣装や各国の食事等が生徒の興味を引いたようで、新たな発見や驚きがあったようである。その後、生徒の企画により肢体不自由特別支援学校の特色をクイズにしたものを出題し答えて頂くなどして楽しんだ。また、肢体不自由校で行っている体育を留学生の方にも経験して頂こうと、グループ毎に分かれてリレーの体験を行った。活動を共に行うことで、英語の活用以外にも様々な手段でコミュニケーションを取り、積極的に自ら他者に働きかける機会と

なったようだ。





（4）小学部高学年と JICA 研修生との交流

５・６年生は、これまで総合的な学習の時間などで日本の自慢について調べてきた。11 月５日の学習発表会では、特に和菓子や畳について調べた成果を舞台の上で発表した。また、12 月５日には、オセアニアやアフリカの各国からいらした JICA 研修生の方々にも聞いていただいた。発表後は実際に畳の上で和菓子と緑茶を味わっていただき、研修生からは「和菓子や畳などの日本の文化や歴史のことがよく分かり、勉強になりました。」「いつもは甘い物はあまり食べませんが、和菓子は美味しくて全部いただきました。」「みなさんの hospitality に感謝します。」などの感想があった。




（5）オリンピック・パラリンピック教育　「１学級１国運動」

当校は、見学・研修等のため年間数十か国から海外の方々が来校され、交流する機会がある。その際には、交流する主な学部や学年が事前に来校者の出身国に関する情報（挨拶の言葉・地理上の位置・食事など）や国旗の確認を行っている。形式は異なるが、長野で行われた「一校一国運動」のような活動（長野市校長会・長野市教育センター国際化教育研究委員会編、1999）がこれまでに行われている。昨年度より、2020 年の「オリンピック・パラリンピック」という視点を加えて１学級１国運動に取り組んだ。

１学級１国運動をするにあたり、まず、体育の時間に、オリンピック・パラリンピックの歴史や理念、2016 年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックや 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの話題に触れる機会をもった。児童生徒の実態に合わせて内容を工夫し、オリンピック・パラリンピックに関する知識を深め、異文化・国際理解に関心を向ける契機とした。

次に、児童生徒にとって身近な国々や見学・研修等で来校される海外の方と交流が決定している国々、社会科地理的分野で扱われる国々との関連を考え、社会科教員と連携して学級で担当する国を決定した。具体的には、隣国の韓国、中国をはじめとするアジアの国々、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア等の比較的よく耳にする国々である。決定後は各学級担任に１学級１国運動を委ね、朝の会や帰りの会、給食の時間等の学級での時間を活用し、学級の実態に応じた内容で展開された。例えは、その国の衣食住やスポーツ等の話題に触れる、国旗を調べる、国歌を聞く等の活動で、興味関心を高め、異文化・国際理解を深めようとする取り組みである。

近年、当校の運動会では、国際教育の視点から国旗を使用した競技を行っている。小学部１・２年生の集団種目「Kids a small world」がそれにあたる。これは、五輪のマークが描かれた大きな旗に、リレー形式で国旗を貼りつけていき、制限時間内で貼りつけることのできた国旗の数を競う競技である。世界のスポーツの祭典であるオリンピックのシンボルは、学校のスポーツの祭典である運動会にもふさわしいものと考え、大きな旗の中心に五輪のマークを描いた。五輪のマークは児童にとって非常にシンプルで視覚的にわかりやすい。また、五輪のマークは五大陸の団結を意味していることから、運動会に向けて児童の団結を深める活動として、五輪のマークを児童が手形で作成した。



競技では、小・中学部で行った１学級１国運動の国々の国旗および高等部において例年行われている国際交流の交流先の国々の国旗を使用し、競技に出場する学年だけでなく応援する児童生徒も視野に入れ、他学部他学年の取り組みとの関連づけを試みた。

このように、運動会を日常における学習や体験に結びつけながら国際活動教育の推進を図っている。

３．児童・生徒の変容

今年度の国際教育活動を振り返ると、海外からの来校者と触れ合う機会を様々な場面で統合的に活用されていることがわかった。それは、「留学生交流会」「オリンピック・パラリンピック教育」で身につけた力を「韓国・台湾訪問」で発揮できたからである。台湾を訪問した高等部の生徒二人は、仲が良くとても明るいが、自ら人前に出て行くような積極性はあまり見られなかった。しかしながら、台湾に滞在した４日間において主体的に行動する姿勢が現れ、現地の生徒とも積極的にコミュニケーションを図ろうとよく努力していた。帰国後に開かれた校内での報告会においても、自信を持って生き生きと発表しており、その場で出た質問にも適切に応答することができていた。

本校の生徒は元来、おしゃべりが好きで人懐っこく、学習に熱心に取り組むことができる。その良さを生かして、誰とでも、どんな場所においてもコミュニケーションをとり、自己発信できるように国際教育をさらに発展させていきたい。

附属久里浜特別支援学校の国際交流
～中国の姉妹校との交流を通して～

１．本校の国際教育の概要

本年度も幼児児童は本校に来校する見学者と触れ合い、授業の中でやりとりする機会をもって外国への興味・関心を高める取組を行っている。教員は、中国の姉妹校の教員とスカイプによる授業研究会を行い、自閉症教育についての意見交換や授業実践についての協議を行った。

２．活動の具体内容

（1）中国蘇州工業園区仁愛学校との、スカイプを利用した授業研究会

①第一回　４月７日（木）

昨年に引き続き、姉妹校である中国蘇州工業園区仁愛学校（以下仁愛学校）と、スカイプを利用した知的障害を伴う自閉症児の授業研究会を実施した。

今年度第一回目は、４月７日（木）に実施した。前回は本校の授業についての協議を行ったので、この回では相手校の授業の様子を DVD 視聴した。DVD の内容は、「ピザ作り」という分類についての算数の授業と、「買い物の達人」という社会科の授業であった。研究会では最初に授業について担当教員が説明し、その後、本校の教員から質問がなされた。質問は、授業のねらいは何か、子供の達成をどう評価するか、本時にうまくいかなかったと思われる点を次の授業ではどのように改善したかなど多岐にわたった。その後、本校での授業改善や家庭支援の方法についても述べた。この回では、両校合わせて約 30 人の教員が参加し、２時間ほどの協議がなされた。




本校側の様子




相手校のスカイプ映像

②第二回　９月 20 日（火）

９月 20 日（火）に、２回目を実施し、本校の授業を通して授業研究会を行った。授業は、小学部４年の音楽で、ねらいは音楽を楽しいと感じて「楽器を鳴らしてみたい」「曲を聴きたい」「声を出して歌いたい」と児童が自発的に参加できることである。仁愛学校には、授業の DVD、授業（本時）の流れを書いた指導案、音楽のねらい、選曲の理由、楽器の選択理由、教材の工夫について事前に伝えた。

協議は、仁愛学校の質問から始まり、２つの話題で進んでいった。一つ目は、ST（サブティチャー）の役割について、二つ目は、個人目標の達成についてである。ST の役割については、「子供の視線を MT（メインティチャー）に向けるように促す」、「体の動きや表情で、一人一人の子供たちの声や動きを引き出す」ことと説明をした。個人目標の達成については、「子供の実態の異なる集団で、個々の目標をどのように評価しているのか」、「集団で行う意味は何か」、「全６時間計画しておいて途中で目標を達成したらどうするのか」、などの質問が出た。このことについては、１時間ごとの授業の評価と本単元全体の評価とのつながりや個人目標と全体目標との関連などを説明したが、言葉として明確に、説明できる準備をしておく必要があったとの反省した。

以下は、本研究授業に参加した本校教員の感想である。

「仁愛学校には通訳者がいて、言葉の橋渡しをしてくれます。私たちの授業に対する中国の先生たちの疑問や興味・関心の内容はとても新鮮でした。同時に、その疑問に答えることはとても難しかったです。なぜ中国の先生はそう考えるのか、なぜそこに疑問を抱くのか、そして、何と答えたら理解してもらえるのか、それらを明確な言葉にしていくことがひいては、私たちの授業のねらいや指導及び支援の手立てを明らかにすることになり、授業改善につながると思いました。また、中国の先生たちの考えやその背景、教育文化をもっと知る必要があるようです。今後も、授業研究会を通して、互いの目的であるお互いの国の子供たちの特別支援教育の向上のために努力していきたいと思います。」



本校側の様子



相手校のスカイプ映像





教材「ハメハメハ大王のペープサート」と授業の様子

（2）JICA アフリカ研修員との交流

12 月 12 日（月）、JICA 筑波で研修中のアフリカ諸国の研修員が来校した。ソロモンやケニア、モロッコなど 8 カ国 11 名の研修生は、午前中に各学部の授業見学を行った。幼稚部ではひよこ組の餅つきを見学した。最初は、初めて見る日本の文化に驚いた様子だったが、子供たちと一緒にお餅をつくときの研修員の表情には笑顔が見られた。その後、小学部では、４・５年合同の音楽の授業を見学した。ドレミの歌のペープサートに合わせて歌を歌ったり、いろいろな楽器を使用して合奏をしたりする児童の様子を真剣な表情で見学していた。




幼稚部での餅つき体験の様子




小学部の音楽の授業見学

午後からは、幼稚部主事と小学部主事が「知的障害を伴う自閉症の指導の実際」について講義を行った。両学部の教育課程や授業内容の説明や、本校の個別の指導計画や教育支援シートの書式についての説明を行った。




講義の様子

（3）海外からのお客様との交流

本校では、様々な海外からのお客様を迎え、その様子をホームページで紹介している。以下に平成28年度のお客様との交流を振り返ってホームページの原稿を紹介する。

① 外国人留学生との交流

6月29日、筑波大学教育研究科で受け入れている第36期外国人教員研修留学生の訪問を受けました。今回は、インドネシア・フィリピン・ブラジル・ホンジュラス・メキシコ・ガボン・南スーダンから7名の研修員が来校し、本校の子供たちの授業参観や施設の見学がてら、七夕の飾り付けや運動などを通じて交流会を行いました。子供たちも留学生もとても楽しいひとときを過ごしました。



幼稚部の授業見学



小学部の授業見学

② インドネシアからの視察団

12月22日（水）にインドネシアから10名の視察団を受け入れました。来校されたのは、インドネシアの地方の州の教育行政関係や議員の方々で、これから特別支援学校を作るための情報収集を目的とした視察でした。

この日、本校は終業日であったため、午後からの来校となり、学校概要の説明の後、校内の教室環境等を見学していただきました。これから学校を新設していくための視察であったことから、日本の障害種ごとの特別支援学校の設置の在り方、教員配置などに強い興味関心を抱いていて、教員の所有する免許の種類や学校運営にかかる予算などに関する質問が多く寄せられました。





JICA 研修「障害のある子どものための授業づくり」を終えて

１．本センターの国際教育への取り組み

本センターでは今年度独立行政法人国際協力機構（JICA）からの委託を受け、課題別研修「障害のある子どものための授業づくり」を行った。これまでにも JICA の特別支援教育の改善、充実の事業に日程や研修内容をコーディネートする形で協力してきたが、今回は初めて委託での研修となった。

委託となって本センターの特色をより活かせるよう、附属特別支援学校５校との連携や教材・指導法データベースを用いての教材に関するワークショップなど、これまでの研修内容を踏襲しつつ、より現場に近い実践的な内容を多く取り入れた。

研修員はフィジー、ケニア、レソト、モロッコ、ニウエ、パラオ、ソロモン、スワジランドの８ヶ国より、計 11 名が来日し、2016 年 11 月 24 日（木）～ 2016 年 12 月 16 日（金）の期間で研修を行った。



２．研修の様子

研修は学校および施設見学、講義、ワークショップなど障害のある子どもの教育を幅広く網羅するように構成した。

附属特別支援学校５校へは、それぞれ１日ずつ（附属桐が丘は施設併設学級を半日加えて）訪問させてもらった。それぞれの附属特別支援学校では、学校概要や各学部の教育について講義を聞き、各障害種に応じた授業実践を見学した。学校見学は研修員の関心が最も高く、毎回参観する授業の様子はもちろん、校内や教室内の環境、教材などすべてにおいてどういう意味があるか、それぞれの障



研修員との意見交換の様子（附属視覚特別支援学校）

害に対してどのような配慮をしているのかなどを考え、また積極的に質問することも多かった。

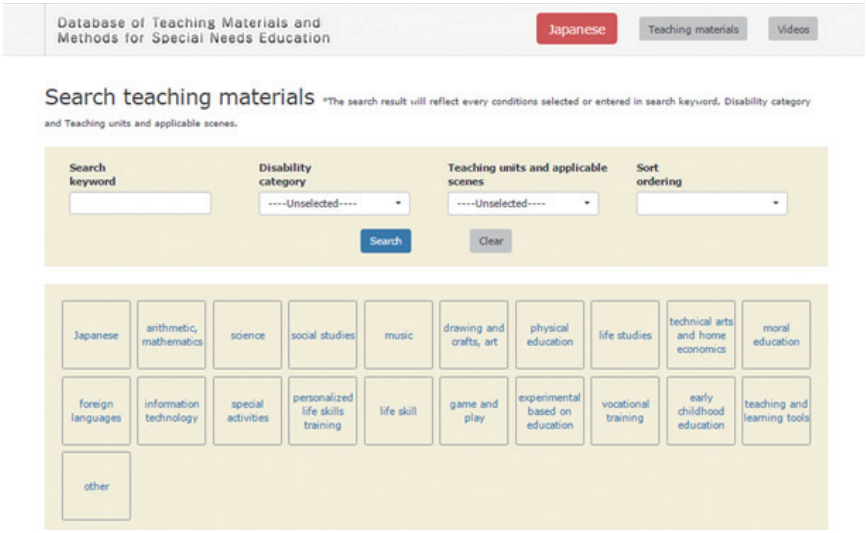
職業課程の専攻科がある附属視覚特別支援学校では、鍼灸科の治療室見学およびインドの職業教育支援に関わってきた教員との情報交換を行った。鍼灸科卒業生の就職率を中心とした進路状況に関する説明や、鍼灸科による留学生事業、インドへの手技療法教育移転事業が説明され、研修員の国における現状や、それら事業の実施可能性に関して活発な意見交換が行われた。

見学先の中では唯一のインクルーシブ教育実践校である守谷市立大井沢小学校では、５つの特別支援学級の授業と、合理的配慮を必要とする児童が在籍するクラスの授業を参観した。知的・情緒・言語それぞれの障害に応じた特別支援学級の授業では、特別支援学校とはまた違うねらいや配慮があり、自国においてインクルーシブ教育を行っている場合が多い研修員にとって、大井沢小学校での見学は貴重な内容となった。

最後の見学先となった国立特別支援教育総合研究所（NISE）ではインクルーシブ教育システム構築についての講義の聴講、NISE ならではの ICT 機器、スヌーズレンなど施設・設備の見学をした。

いずれの見学先においても、特別支援教育に関する施設・設備の充実は、研修員にとってとても関心が高いものだった。また、研修員は自国において、特別支援教育またはインクルーシブ教育の現場に関わった経験があるため、訪問先の学校で子どもを前にして実際にふれあう場面は、研修員も子どもたちも最も笑顔のあふれる時間であった。

研修では授業づくりに活用できる教材ということに着目し、本センターが提供する教材・指導法データベースを用いたワークショップ形式の内容を多く取り入れた。具体的には、教材・指導法データベースの英語版を閲覧し、特別支援教育における教材情報を入手してもらうとともに、教材情報の提供システムとしてデータベースを用いた方法を体験してもらった。データベース英語版作成にあたっては、これまでも JICA 研修員を受け入れてきた経験を活かして、どこの国でも手に入る材料を使った教材という視点で英訳教材を選定し、その訳語の確認あるいは用語の整理、統一を図った。

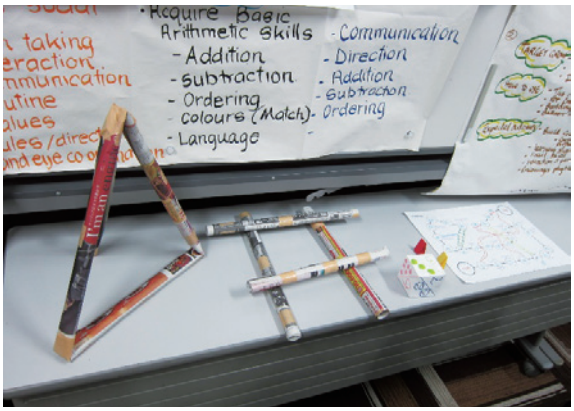


教材・指導法データベースの英語版検索画面


熱心に教材作成に取り組む研修員　手作りパズルが完成！



セミナーでの発表の様子



セミナーでの教材展示（新聞棒の活用とすごろく）

ワークショップでは、データベースに挙がっている教材の中からいくつかを取り上げ、実際に作成したり、ひとつの教材についての汎用性や活用場面などを２グループに分かれてディスカッションをしたりした。ここで取り上げた新聞紙や牛乳パックなどをリサイクルした教材は、研修員も大変興味を示し、教材の開発や活用について新たな考えを得ることができたようだった。教材に関するグループ活動の成果は、研修期間中開催された本センター主催のセミナーにおいても展示・発表され、各附属特別支援学校から参加した先生方とも意見交換をすることができた。本センターにとっては教材・指導法データベースの海外発信を進めていく上での検討課題を得ることができた。

研修における最大の目標は、個別の指導計画を取り入れ、授業づくりに活かすということであった。個別の指導計画と教育支援計画については、本センター教授・柘植雅義先生の講義を受講した後も、各附属特別支援学校での実践を見学し、さらに有用性と必要性を感じた研修員が多く、研修を通して最も需要の高い項目であったと考えられる。研修期間の中盤に設けた柘植教授との質疑の時間では、それまでに研修員が疑問に感じたことなどたくさんの質問が出され、活発なやりとりがされた。

研修の終盤はJICA筑波に拠点を移し、２グループに分かれて成果品の作成作業を行った。成果品として、グループによる個別の指導計画とそれに基づく授業案、および個々での帰国後のアクションプランについて作成をした。グループ作業では研修で学んだことを出し合いながら、子どもの姿を思い浮かべ、個別の指導計画と授業案を作成した。また、個々には、この研修で得られた成果をどのように国の教育政策へ還元するかという具体的な時期や方法を示し、帰国後のアクションプランを立てた。研修最終日にこれら成果品の報告会を行い、その後の閉講式をもってすべての研修が終了した。

【研修員からのコメント】

・学校視察や講義は本当に楽しく多くを学んだ。
・特に有益であった内容は学校訪問。指導案に記載されている内容に従い、実際に授業が行われている様子を視察したこと。
・自国で特別支援を要する生徒を指導するにあたり、一番大変なのは彼らのニーズに応じた個別の学習方法を準備し提供することである。本研修に参加したことで、自国で生徒たちへの効果的な支援を確実に授業に取り入れていくためにどのように先生たちをサポートすればいいのかアイデアを得た。本研修に含まれていた内容はどれもとても興味深い。特に、特別支援教育対象の生徒へのアクティビティのアイデアと指導案が参考になった。
・本研修ではとても参考になる知識と技術を共有してもらった。自国で取り入れて実施するのに役立つ。
・使用済みのものを教材にリサイクルすることが印象的だった。

研修員の感想から、今回の研修が少しでも国際教育支援に貢献できたことをうれしく思う。今後も海外でニーズの高い特別支援教育の側面から協力できるよう、今回の反省点を改善し、効果的な研修プログラムの開発に努めていきたい。

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

留学生との交流

活動の実際

留学生との交流会　各クラスに 10 名を目安として 4 人グループに 1 人の留学生が入る

①出会い（校長室にゲストを迎えに行き、簡単な自己紹介と学校案内　教室・特別教室などへ案内する）

Hello, welcome to Tsukuba Fuzoku elementary school.

I'm Miki. Nice to meet you.

②世界各国のあいさつ

How do you say "Hello" in your country?

③英語を使った Guessing game

④ This is me! ポスターを使って自己紹介活動

Hello, I'm Taro.　I'm 10 years old.　I live in Shibuya.　I like baseball.　I don't like…

⑤留学生のプレゼンテーションを聞く場面

⑥日本の文化（遊び）紹介（けん玉、福笑い、おはじき、書道、お手玉、おはじき等）





交流後にそれぞれの活動の様子をポスターにまとめ、プレゼンテーションを行った。児童が、交流を通して感じたこと、気づいたことを振り返り、今後の学習への意識づけに繋げた。英語を理解してもらえた嬉しさ、あるいは英語で言いたかったけれども言えなかった言葉、交流をする楽しさなど、それぞれ児童の学びがあった。





附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

① 活動報告

本年度も前期は火曜日、後期は火曜日と水曜日の週に２日、昼休みと放課後にイングリッシュルームを開設している。昨年までおつとめいただいた、オーストラリア人のキミー先生に代わり、今年度からウクライナ人のターニャ先生が、マクレイ先生とともに ALT として来てくださっている。来ている生徒達の会話を耳にすると。非常に楽しそうで、話が自然に続いているのがわかる。ALT の先生お二人は、学年によって、英語の難易度はもちろん、トピックも話しやすいものから、抽象的なものまで変化をつけて工夫してくださっている。

今年度も４月から７月は、３年生が１度は体験できるようにコマを割り振っている。この他、イングリッシュルームを２回は活用していることがアメリカ留学応募の条件でもあり、その生徒達が３年割り振り後の時間帯に入る。来室を誤りなく記録しておくことは気を遣うが欠かせない仕事である。

② 生徒の感想



◇イングリッシュルームでは、英語の技能だけでなく、外国の考え方や哲学的な話もしてくださるのが楽しいです。ターニャ先生は、わりと抽象的な話もあります。マクレイ先生は、ご自分の経験からの教訓のようなこともお話くださいます。

私が、数学は苦手だ、と話したら、マクレイ先生は、「数学は賢く生きるためのツールだから、苦手でもきちんとやっておいた方がよい」と話してくださいました。ターニャ先生は、外国の文化の良い面や悪い面の話、また「どんな道を選んでも結局は同じ所に到達する」という考えを話してくださったのですが、私と友人は「選択によって全く違う結果になる」という考えだったので、違いが面白いと思いました。

（こんな抽象的な話でも英語でわかるのか？という問いに）さすがによくわからない時は、「図に描いてもらえませんか？」と頼むようにしています。

◇まだ、話し出す前に文法を考え過ぎてしまって、沈黙になってしまうが、なるべく文法を考えないようにしています。

◇「勉強」ではなく、友達と話しているような気持ちになれます。悩み相談もしたことがあります。



イングリッシュルームに行くことで、変化した点はありますか？

◎始めは、何話せばいいんだろう、と話題に困る気がしましたが、この頃では自分の頭に浮かんだことを英語にできるようになってきたので、自分から話題をふれるようになりました。

◎始めは、外国人の先生と話す、というだけで怖すぎて、イングリッシュルームに来ても友達に通訳してもらう有様でした。それが今では、「英語を訳すルーム」ではなく本当に English Room と感じられるようになりました。

◎イングリッシュルームに来ると、辞書で見る語も「本当の使われ方」がわかるし、難しい単語を使わなくても「あ、それでいいのか」とわかることがあります。「異文化理解」を crosscultural exchange と調べていったが、understand your culture でもいいんだ、とわかりました。

附属高校のイングリッシュルーム活動について

① 活動内容

2013 度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度 4 年目を迎えた。前期は毎週木曜日の放課後と金曜日の午後に、後期は金曜日の午後、マクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）にお越しいただいた。前期木曜日の放課後は、各 SGH プログラムに参加する生徒に対して、英語による研修を実施した。前期および後期の金曜日の午後は、昼休み、午後（授業のない 3 年生対象）、そして放課後の 3 部に分けて実施した。1 コマ 20 分に設定し、事前予約を含めた先着順で生徒が参加した。目的や学年を問わず幅広く誰でも参加できる場として設定して、今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のように分けられる：

✓ 国際交流事業への参加者選考へ向けた準備（1 年生）
✓ 英語表現 I の授業で行うスピーチの原稿の添削（1 年生）
✓ 海外留学や国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（1 ～ 2 年生）
✓ 大学入試に向けた英語のエッセイの添削（3 年生）
✓ 英語の運用能力を伸ばすため（1 ～ 3 年生）

② 生徒からの反応



個別にじっくり対応をしてくれるため、エッセイの添削やスピーチの準備などを必要としている生徒には非常に好評であった。国際交流事業（国際シンポジウムなど）に参加する生徒は、英語運用能力のみでなく幅広い話題に対応する知識や柔軟性が必要である。このため、マクレイ先生は毎回異なるトピックを提示し、楽しくも時折鋭く切り込んでくださった。参加生徒はやり甲斐を感じて懸命に取り組んでいる様子であった。

参加した生徒達からは、「マクレイ先生のおかげで、授業課題のスピーチが上手にできた」「最初は緊張しましたが、とても楽しく英語で話ができた」「短期留学の準備ができてよかった」「英作文を丁寧に添削してもらえて勉強になった」という感想がありました。

③ 今後へ向けて

「イングリッシュルーム」については、ポスターを学校中に掲示することで案内をしている。周知度は低くないとは思われるが、生徒とによっては、すでに英語がある程度話せる人や海外へ行く予定がある人が行く場所、という認識をもっているようだ。さらに、生徒は日々の授業（課題）、部活動、委員会や行事の準備などで毎日大変に忙しい学校生活を送っているため、彼らのタイミングを合わせるのが難しい時期もある。「イングリッシュルーム」の時間、利用方法などを今後さらに検討し、一人でも多くの生徒が気軽に英語が学べる場所を提供できるよう工夫していきたい。

English Room：海外研究発表とその先への支援

１．活動報告

昨年度同様、本校近隣の東京大学の留学生ロッジ居住の大学院留学生に依頼する形で、イングリッシュルーム活動を継続している。色々な国々の出身で、専門も理数系に偏らない様々な分野に渡っているため、生徒たちは多様な英語、多様な考え方に触れることができる。また大学院生というアカデミックバックグラウンドから、プレゼンテーションなどに対する的確なコメントをその場でもらえることが、生徒の発表の質を効果的に高めているとも言える。

通常の活動は月に２～３回ほど、平日の放課後１時間半程度、ＬＬ教室を使い、その日に来た生徒の学年やレベル、ニーズに応じて相手をしてもらっている。また、中３テーマ学習・高２課題研究の「サイエンス・ダイアログ」での生徒の最終発表、台中一中や釜山国際高校との交流での発表リハーサルにおいて、プレゼン指導だけでなく、必要に応じて原稿チェックなども依頼している。

２．生徒の感想

中学生からは、普段の授業の先生（ＡＬＴ）とは違う人たちなので最初は緊張したが、英語で何か伝わった時はうれしく、英語で話すことに抵抗が減ってきた、などの感想が寄せられている。
海外派遣プログラム参加の高校生からは、イングリッシュルームなどでの事前指導により、安心して本番に臨むことができたとの声が多数あった。また、本校卒業後に海外大学院などへの進学を考える際にも、このような経験が後押しとなったという意見も聞かれた。

３．考察

あくまで本校での実践例からの所見だが、それぞれの目的（課題研究・海外発表）のため、勇気を出して、初めての外国人に指導を仰ぐという形が、本校生徒（特に高校生）の English Room 経験のきっかけのほとんどだと思われる。一度体験して、それが自らの発表などでの成功体験につながれば、同じような機会に臆することなくチャレンジできるようになると言える。English Room の良さを、教員だけでなく、経験生徒の力も借りて、全生徒に発信していくような方策を検討していきたい。

（文責：研究部・国際交流係　山田 忠弘）



通常活動（図書スペースにて）



プレゼンリハーサル指導

楽しい英語活動とSGH校としての活動の両立を目指して2016-2017

① 活動報告

本校では2013年よりイングリッシュルーム活動として、昼食時のEnglish lunch（イングリッシュランチ）と、放課後のEnglish Cafe（イングリッシュカフェ）を、週1回取り組んでいる。2つを総称してEnglish Lounge（イングリッシュラウンジ）としている。

English Lunch …… 12：30 ～ 13：10　Wednesday　40min
English Café …… 15：40 ～ 17：40　Wednesday　120min

English Lunchでは、生徒の出入りの多い学習スペースを使って、ALTと昼食をとりながら英語に親しむ。生徒も教員も各自弁当を持参し、会話のテーマは特に決めない。English Cafeでは、ボードゲームや映画鑑賞をしながらALTとの会話を楽しむ。また、ハロウィンやクリスマス等の行事を行っている。

本校ではB棟各階のロビーに学習スペースを設けている。ここは生徒が勉強をしたり、教員と面談をしたりする等、様々な用途に活用されている。本校の「イングリシュルーム」活動は主にこの開かれた場所で行われるため、写真でも分かるようにEnglish lunch、English caféとも、生徒が自由に参加し思い思いに楽しんでいる。冬期は寒さのため近くの特別教室（福祉実習室）を利用するが、ロビーでの活動の方が生徒が集まる傾向にある。Roomではなく、Lounge（名:社交室、休憩室、動:ぶらぶらする）と名付けられたのはそこに理由がある。

本校は2014年にスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された。これにともない、英語によるプレゼンをする機会や英検受験者が増加した。これにともない、①国際社会等開発科目における英語プレゼンの添削指導、② 本校主催ESDシンポジウム及び全国SGH校生徒成果発表会に向けたプレゼンの指導、③ 生徒のSGH報告書についての添削指導、④ 本校を訪れる海外生徒との交流の場を提供、⑤英検の面接練習などを行った。

ただ、参加者数が少なかったり、参加メンバーが固定化している面もみられる。このため、効果的なイングリッシュルームの在り方について、校内の国際教育推進委員会で検討する必要があると考えている。

② 児童生徒の感想

・毎回はできなかったが、英語の力をつけたいのでできるだけ参加したい。（3年男子）
・冬は寒いので、温かいお茶や、ソファーの近くにストーブがあるとうれしい。（1年女子）
・海外フィールドワークの報告書が、ALTの先生の助けで完成できた。（2年女子）
・プレゼン資料作成に関して、英語の表現はもちろん外国人の視点からのアドバイスが役に立った。（1年女子）


クリスマスパーティーで


バーベキューもやりました

（文責：建元喜寿）

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

Ⅰ　2016 年度「イングリッシュ・ワークショップ」活動報告　（幼稚部・小学部）

1．はじめに

本校では「準備期」の 2013 年度、「試行期」の 2014 年度、一応の「決定期」の 2015 年度の活動を経て、学習内容を更に充実させ、継続参加の児童たちが好奇心を維持して楽しく学び、学習効果の出るカリキュラム作成に重点を置いた「進化期」に当たる 2016 年度の実践活動を報告したい。

年度	クラブ名	クラブ編成	実施日	学習内容
2016	Apple Club	幼稚部	月１回　金	動物・野菜果物など保育教具使用の発展学習
	Blueberry Club	１・２年生	月２回　月	歌・チャンツ・「数・形」からの発展学習・歳時記
	Coconut Club	３～６年生	月２回　月	アルファベット文字・フォニックスの学習・歳時記
	Kids' Club	１・２年生	月１回　金	Blueberry Club との連動学習・歳時記

2．2016 年度の活動

2016 年度の“English Workshop”の特色は、①イングリッシュルームの再整備 ②Blueberry Club と Kids' Club の参加者が、１名を除いて重なる ③毎回保護者、祖母、父親など参観者が多いことである。

1）Apple Club:

参加者は新入の年少３名、活動経験のある年中１名、年長１名の小規模グループである。例年通り、保護者とともに日・英語のリズムの違いを知るゲームやお遊戯から開始した。



サンタごっこの様子

本年度は月１回の活動のため、語彙はあまり増やさず、「数・形・野菜果物・動物」など保育室の玩具を使用しての発展学習を試みた。自分の名前の Q&A は、ぬいぐるみを選び、“My name is Panda!”など「なり切りごっこ遊び」で定着を図った。「数・形」からは、ハロウィーンバッグ作製、果物の色と連動させて「虹の歌」を果物で歌ってみる。野菜果物を２つのバスケットに種類分けで入れたり、動物のぬいぐるみから「干支の動物」を英語で言いながらえり分けて、日本文化のお勉強もした。白い大きな袋にクリスマスプレゼントを入れ、サンタ帽をかぶってトナカイ帽子をかぶせた大きなエコポニーに乗り、「ホー、ホー、ホー」と保育室を元気に駆け回り、「トランポリン・ハウス」にいるお友達にプレゼントを配った「サンタごっこ」も大好評であった。楽しかったことを尋ねると…

★幼児の感想：「ハロウィーンの仮想ができたこと。かぼちゃのランタンは怖かった」「クリスマス！」

「歌が歌えて楽しかった」「ぬいぐるみがいっぱいあった」「楽しくないことはなかったです！」

★保護者の感想：「季節のイベントがたくさん企画され、欧米の本物の様子を学んで、家庭でも真似をした」

「親子で一緒に英語に触れ、習い事ができるという貴重な経験ができ、良い思い出になった」

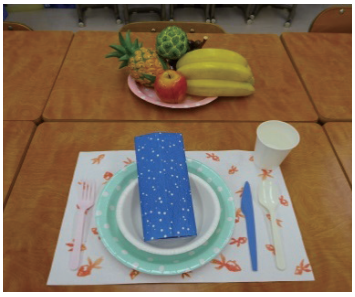
2）Blueberry Club:

参加者の２年生７名は全員男子で昨年度からの経験者。１年生は幼稚部での経験がある女子１名、

２名の男子も英語学習の経験があり、クラブ運営は非常にスムーズに行われた。また授業の一環として月１回実施されている１、２年生参加の Kids' Club のメンバーと、１名を除いて重なるため、児童にとっては「月３回」の英語活動体験となっている。これを「利点」と考え、２年生の学級担任とも相談し、その１名に配慮しつつ、Blueberry Club と Kids' Club 一環のカリキュラムを作成した。

他の補習授業などと共同使用していたイングリッシュルームが、本年度は本来の“English Workshop”として再整備され、８脚の同じ高さの新しい机とそれに見合った 11 脚の椅子が整えられた。教室の状態が常に同じで動きやすく、活動内容によって、各卓上に置かれた自分の名札を探して着席したり、４卓ずつに分けた２つの「島」を囲んで、すごろくゲームを楽しむなど、活動の種類、範囲が広がった。

本年度新しく導入した「形・左右・上下の学習」を発展させた紙のランチョンマットやお皿、ナイフ、プラスチックのフォークやスプーンを使っての「テーブル・マナーの学習」も効果的であった。このクラブでの「干支動物の学習」は、“Animal Counting Chant”を使って、児童は１匹ずつ好きなぬいぐるみの動物を手に持ち、先生：“Two is a dog,”／犬を持った児童：“I have a dog.”／先生：“that says,”／児童全員：“Bowwow!”と「鳴き声学習」と連動させた。この“I have a dog.”の項では、全員が自然に今はやりの「ピコ太郎」のリズムで唱え、特に本校では「耳学問の大切さ」に改めて注目した。


テーブル・マナーの学習

★児童の感想：「楽しかったことは、野菜や果物、動物の名前を勉強したことです」「ハロウィーンやフィリピンの先生が来たクリスマス・ワークショップが楽しかった」「タッチペンでカード（Saypen Cards）を読んだことが面白かったです」「歌を歌うのが楽しかった」「楽しくなかったことは…ないで～す」

★保護者の感想：「子どもたちがキャッキャと楽しく学んでいるのは、見ていて楽しい」「笑いがいっぱいで、親も嬉しくなる」「英語好きになってくれたのが嬉しい」「発音がとても良い」「家のお風呂でも、英語で数を数えたり、歌を歌っている」「英語は休みたくないと言っている」

３）Coconut Club:

参加者は、３年生１名、５年生２名、６年生４名である。３年生１名を除いては、2015 年度に当クラブに参加し、アルファベット「文字の形」、「文字の基本音」は、すでに習得している。（詳しくは『附属学校国際教育推進委員会報告書（第７集）』p.81 参照）今年度の試みとして、「子音字の組み合わせ」による「新しい音の読み」に挑戦した。例えば、“ck=/k/”と学び、“back, black, clock”などの単語プリント、次にそうした単語を使った有意の“I have a black clock.”などの文章プリントを読み、最後にターゲットとした“Hockory, Dickory, Dock”の歌詞を読んで歌い、「時刻」を言ってみる活動へと連動発展させた。自主作成の「読み教材」は、クラブ活動担当教諭の協力を得て点字プリントを作成して各人に配布し、クリアファイルに入れて自宅に持ち帰らせている。送迎の保護者にも活動内容を説明し、自宅復習を促している。

★児童の感想：「全部楽しかった。Saypen を使って英語を学び、読めるようになった」「CD を使って、リスニングの勉強をしたこと」「英語のいろいろな勉強をして楽しかった。これからも英語頑張りたいです」（６年生）「ローマ字と数の勉強が楽しかった」「単語帳の読みは難しかった」（下級生）

★保護者の感想：「イベントに合わせて英語の勉強ができたのがよかった。皆頑張っていてえらいと思った」

３．おわりに

本校では、年１回は英語母語話者の「生の英語や異文化」に触れる機会を設けることに留意している。津田塾大学国際センターからの留学生ゲストティーチャー派遣も軌道に乗り、12 月には３人の留学生を迎えて“Christmas Workshop”を開催した。留学生もお友達となって、名札渡しや、「エルサレムへの旅」という椅子取りゲームを楽しんだ。こうした会には全校児童に自由参加の機会を与

え、大きな教室の周りに保護者席も設けて公開し、児童の活動を紹介すると共に、保護者もゲームに加わり、一緒に「異文化体験」をしてもらう試みを開始した。

2017 年度も、各クラブそれぞれに本年度の活動を更に発展させ、幼稚部教諭、学級担任、クラブ活動担当者一同協力して、「継続性のある有意なカリキュラム」の作成に努力したいと考えている。　（文責：股野儷子）



英語体験活動
“Christmas Workshop” の様子

Ⅱ　中学部

1．実施内容

中学生の希望生徒を対象に放課後（月曜 15：20 ～ 15：50）、英語のネイティブスピーカー（English native speaker）と自由に話せる教室を用意し実施した。中学生の場合、学年ごとに英語力が異なるため、それぞれの学年レベルにあった話題となるよう学年別の実施とし、ローテーションで回した。

中学生の英語力では英語だけで会話をするのは困難なため日本人英語教師を配置したが、２学期以降の中３の English Room においては日本人教師を配置せず、生徒が英語だけで会話するよう試みた。

今年度は定期試験直前の実施を見合わせた。また外国人講師の諸事情で実施できなかったこともあり、１月末現在の実施回数は 10 回で昨年の 16 回より大幅に減ったが、延べ参加人数は昨年の 50 人から 62 人えと増加した。１回当たりの参加人数でみると約３人から６人への倍増となった。参加者を増やすため導入したポイント制が功を奏した。

2．参加生徒の感想

〈1 年生〉

・私は１年の English Room の全てに出ましたが、英語での会話がしてみたかったので、とても楽しかったです。少し難しい会話も体験できたので、これからも English Room をやって欲しいです。
・英語で外国の人と話すことができて良かった。また来年もやりたいと思った。
・自己紹介の練習になったし、他の人との自己紹介を聞くことができたので楽しかった。外国の先生に質問もできてよかった。
・英語の授業ではあまりできない英語で外国の人と話すことができて良かった。また来年度もやりたいと思った。
・外国の方と英語で会話でき、とても楽しめた。また、発音に気をつけたり、本物の発音を聞けて発音を良くすることができた。
・楽しかった。理由は色々な英語を質問したり答えたりできたから。来年も是非やりたい。
・私は English Room はして欲しいと思います。その理由は英語力が身に着くからです。English Room の雰囲気もいいし、受け答えもしてくださったので、勉強になりました。
・細かく English Room を開いて英語を話せる時間をつくってくれるのは良かったが、１回１回の時間が短いと思いました。
・時間がもう少しあると良いと思いました。
・毎回行っています。良い経験になっています。楽しみにしています。もっといろいろ話したいです。
・もらえる点数を増やして欲しい。

〈２年生〉
・授業以外の英会話をすることができ、いつもは一緒に授業を受けていない人とも一緒にできるのでこれからも出たい。また、もう少し出られる回数を増やしてほしいと思った。英語をやっていても、英会話の時単語がなかなか浮かんでこないので、日常会話の練習もしていきたいと思った。
・休みの話などをして気軽に先生と話せて良かった。これからも続けて欲しい。少し回数を増やして欲しい。
・１回に一つのテーマに沿って進めて行くのは良いと思った。またポイント制度は来年も続けて欲しいと思う。
・English Room はみんなで話しながら復習できるので良いと思う。しかし English Room に出たら２点追加というのは少しすべきではないと思う。たとえば休んだ人がいたりしたら不平等であると思うから。
・色々たたきこまれた。
・頑張って自分で会話文を作ろうとすることが楽しい。English Room は楽しいのだが、始まるまでの空き時間は無駄。この空き時間がなければ、少し人が増えると思う。
・ミニゲームなどの楽しい内容も欲しいです。昼休みにやってみるのも良いと思います。
・英語が苦手な人のために、もう少し翻訳を増やして欲しい。
・英語がわからないのである。通訳が欲しい。

〈３年生〉
・普通、英会話教室というのは料金を払う必要があるがここは無料で教えていただけるし、我々のような人たちが英会話教室に通うのは困難だし、理解されにくいと思うのでこのような機械はとても貴重だと思う。
・１対１の時もあったが話が盛り上がって良かった。コミュニケーション能力がつく良い機会だといつも思っている。将来、英語は大切だと思うので良いと思う。
・聞き取る力がついたと思う。自分の思いや考えを、知っている単語や文法を使って英語で話す力がついたと思う。
・少し質問の内容が理解できるようになったけれど、返しは難しかった。参加回数は少なかったが、コミュニケーションはとれたと思う。
・授業でできない話ができるので良いと思う。しかし、習っていない単語などを使われることがあるので、そこをフォローしてくださる方がいると、よりイングリッシュルームに行きやすくなると思う。個人的には、とても良い機会だと思っているので、これからも行きたいと思っています。
・日本語を絶対に使わない先生だからこそ困る部分があるが、逆を言うと、自分から英語を使わないと相手に気持ちが伝わらないので、頑張ることができた。わからない時は、クラスの人の力も借りて協力でき、良かった。ポイント制があると、行く気になった。
・英語で話すのが恥ずかしかったです。短い文だと話せますが、文が長くなると組み立てが難しくなるので、話せないこともありました。あまり自分からは話せませんでしたが、自分の趣味について話した時が楽しかったです。

３．考察

参加した生徒は英会話を楽しみながら、英語や外国文化への感心を深めた。中学１年生は英会話への意欲、感心が強く出席率が高いが学年が上がるにつれて出席率が下がる傾向がある。次第に英語でのコミュニケーションに困難を感じるためだと思われる。出席率を上げるため本年度はポイント制を導入し、出席率は倍増し、生徒にもおおむね好評だった。しかし一部に「休んだ人がいたら不平等」

との声もあり、生徒とさらに丁寧に話し合う必要がある。中学生には英語ネイティブスピーカーとの英語だけでの会話は困難である。日本人英語教師がどのように関与するのが良いのかは、引き続き検討課題である。（文責：金野　孝）

Ⅲ　高等部

高等部では、６月から３月までの間、計 16 回のイングリッシュルーム活動を実施した。具体的にはイギリス人講師を招き、火曜日の放課後の約２時間、生徒が英語だけでコミュニケーションする時間を設けた。各学年とも最初の２回は、全員がそれぞれ６～８分ずつの個別の面談形式で行った。３回目以降は学年を２分割したクラスごとに希望者を募り、約 40 分間のグループでの英会話の機会を設けた。

生徒の主な感想は以下の通りである。

・普段の英語の授業では読み書きとリスニングを中心に学んでいるため、英語を話す能力はそれほどつきません。しかし English room で定期的にネイティブの先生とお話することで英語を話す機会を得ることができ、楽しみながら英会話の能力をつけることができました。また、英語での会話能力だけでなく、伝えようとする姿勢が大切だということがわかり、コミュニケーション能力も上がったと思います。

・最初のうちは何を話したら良いのか分からず、当惑することもしばしばでした。しかし、回数を重ねるごとに英語で自分を表現することの楽しさを覚え、英語でジョークも言えるようになりました。今後もこのような企画を続けてほしいです。

・イングリッシュルームでは、毎回様々なトピックで英会話を楽しんでおります。授業で得た知識を実用しながら、新たな学びへとつながる貴重な機会です。今後もこのような機会があれば嬉しいです。

・Thank you for talking with us. I was very happy to meet you. And I enjoyed introducing Japanese culuture to you. I was interested in culuture and something to eat of England by talking with you. I am looking forward to meet you again. Thank you very much.

・I think English Room was an opportunity to improve my English and learn different culture. The most impressive memory was a Christmas party in 2015. I got a big chocolate cooky as a result of present game. Sometimes, I could talk about recent news or SNS with my friend.It was also good experience to practice expressing my opinion in English. I'll remember these experiences when I talk with foreign people. Thank you.

このように実生活に密着したコミュニケーション能力の育成に寄与していることがうかがえる。引き続き、生きた英語を活用できる場を提供していきたい。（文責：宇野和博）

イングリッシュルーム活動

①活動報告

小学部、高等部普通科、専攻科では、筑波大学に留学中のブラジル人の先生が週に１度来校し、ランチタイムや放課後に英語を使ったコミュニケーション活動を行っている。

児童、生徒が普段から好んで行っているジェスチャーゲームやメモリーゲームなどを活用し、楽しみながら英単語を学べている。また、ブラジルでは２月にサンバ・カーニバルが開催されるため、今学期はカーニバルについて紹介してもらったり、カーニバルの衣装をまとった先生からサンバの踊り方を教えてもらって、児童、生徒も一緒に踊ったりする経験ができており、こどもたちが異文化に触れ、関心を高める良い機会になっている。









②児童生徒の感想

・イングリッシュルームに行って、英語を勉強したくなった。（小学部児童）
・外国の人とお話することが好きになった。（小学部児童）
・海外が身近に感じ、大学生になったら海外に行ってみたいと思うようになった。（高等部普通科生徒）
・イングリッシュルームで、タブレットPCも使いながら、講師の先生と確かなコミュケーションをとりながらできたのが良かった。（高等部普通科生徒）
・もうすぐ社会に巣立ちますが、海外の人と積極的に友達になりたいと思いました。（専攻科生徒）
・イングリッシュルームのおかげで外国の文化と日本の文化の違いがよくわかった。（専攻科生徒）

（文責：教務主任　山本　晃）

児童生徒の積極性を引き出すイングリッシュルーム

① 活動報告

３名の外国人講師が、それぞれ小学部、中学部、高等部の各イングリッシュルームに待機し、児童生徒のニーズに対応する形で実施している。

木・金曜日を中心に、各学部平均して週２回になるように開設しようとしているが、講師の都合や学校行事、検定試験などで金曜日は開設できないことが多い。また、高等部は普段から放課後が忙しく、イングリッシュルームになかなか参加できない生徒が多いので、他の曜日も加えてほしいといった要望がでている。それほどに、イングリッシュルームは好評を得ている。

活動の内容や進め方は各担当者に任せているので様々である。

小学部では、歌やゲームを通してコミュニケーションをとるために必要な単語（食べ物、動物、色、数、曜日、天気、体の部位など）や表現（挨拶、自己紹介、好きなもの、電話での表現、できることなど）に慣れ親しんでいる。また、ハロウィンやクリスマスの時季にはパーティーの雰囲気で保護者も交えて賑やかに行っている。

中学部では、生徒が主体的に参加できるように、適宜どのようなことを学びたいかを生徒に聞きながら活動内容を計画している。生徒が普段の授業でわからないことや気になっている表現などを取り上げて、普段の授業とは違う楽しい雰囲気で英会話を楽しんでいる。

高等部では、日本語（外来語）と英語の違いや文化の違いを紹介することで生徒の興味・関心の幅を広げている。生徒は毎回、新鮮で興味深い知識を吸収しながら英会話を楽しんでいる。

どの学部においても、児童生徒はイングリッシュルームを楽しんでおり、積極的に活動に取り組んでいる。また、英検の２次試験直前には、受験生徒には優先的に面接練習を行える時間を設けている。そして、英語力だけでなく、コミュニケーションをとろうとする態度や表現しようとする意欲を高めている。イングリッシュルームは、本校の国際教育活動を支える大きな役割を果たしている。



小学部



中学部



高等部

② 児童生徒の感想より抜粋（小５～高３）

アンケート質問項目

１ イングリッシュルームが楽しいと思った理由。

・他学年と交流できる。（中高生３名）

２ イングリッシュルームが役に立つと思った理由。

・これから東京でオリンピック・パラリンピックがありますが、その時に外国の方に道案内をしたりできるかなと思うからです。それだけでなく、ずっと使えるかなと思います。（小６）

・国際交流などで外国人の方と会話をする時に、学んだことを生かせるから。（高１）

３ イングリッシュルームで学んだことを、他のどんな場面で使うようにしているか。

・休み時間（中１）

・英語の授業などです。（中２）
・英語会話の授業で。（高１）
・出かけている時に外国人の方に話しかける時。（高１）

４　イングリッシュルームに参加して自分は変わったと思うこと

・英語をもっと好きになった。（小５　２名）
・英語を使ってみたくなった。（小６）
・今まで知り合った外国の人（英語圏）とまた連絡を取り始め、文通・コミュニケーションを英語で積極的にとるようになった。（中３）
・季節のことや日々の出来事、思ったことを、「どういったらいいか」を気にするようになり、より英語への興味が高まった。（高３）

児童生徒は、一様にイングリッシュルームは楽しいと口をそろえて言う。楽しいだけでなく、英語が上達している実感もあるようである。普段の英語の授業や国際交流活動の場面でも、イングリッシュルームで学んだことを活用している様子が見られ、また自分から外国人に話しかけたり、連絡をとっている生徒もいる。他学年と交流できることが楽しいと思っている生徒も多く、コミュニケーションの幅を広げる場としても役立っていることがわかる。また、2020年のことを考えて参加している小学生がいることは、オリンピック・パラリンピック教育の成果の表れと言えるかもしれない。

ただし、アンケートに書かれた感想には、「日本語は使わないようにしている」という項目の評価があまりよくなかったり、課題となるものも少なくはないので、各外国人講師とも連絡を密にしながら改善を図り、他の国際教育活動にもつなげたい。

6. おわりに

まとめに代えて

附属学校国際教育推進委員会副委員長　今　井　二　郎

本年度も各附属学校においては、国際交流活動が様々な形で盛んに行われ、新規の国際交流協定も附属小学校と韓国松源初等学校、附属坂戸高校とフィリピン大学附属ルーラル高校、そして附属桐が丘特別支援学校と台湾国立南投特殊教育学校、台湾国立和美実験学校、附属３校と海外４校とで締結されました。これらの国際交流活動を「見える化」するため、全附属学校と特別支援教育研究支援センターの協力を得て「筑波大学附属学校群　グローバル教育の世界地図」（2015 年版）にまとめることができ、今年度は特に国際交流活動に参加した児童生徒に対して異文化理解やコミュニケーション意欲などの観点からの変容についても注目いたしました。

本報告集は、平成 20 年度に附属学校教育審議会で承認された三つの拠点構想（先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点）の一つとして、国際教育拠点を推進するための国際教育推進委員会が設置され、19 年度から教育長裁量経費を活用して行われていた国際交流活動をも含めてまとめた報告集が第１集となり、以降、毎年度各附属学校の国際交流活動とその成果を紹介して、今年度第８集となりました。この８年間で附属学校児童生徒の海外での研修と交流、海外の学校から児童生徒の受け入れ、また教員の派遣と受け入れの数について平成 22 年度と 27 年度を比較してみると、（延べ数であるが）海外への派遣については、附属学校児童生徒が 97 人から 265 人へ、教員が 50 人から 71 人へ、また海外からの受け入れでは、海外学校児童生徒が 217 人から 306 人、教職員が 134 人から 625 人にそれぞれ増加しました。また附属学校と海外の学校との交流協定についても、平成 22 年度の附属７校と海外７校、28 年度には附属９校と海外 17 校というように急増しています。

これらは「国際化対応能力を培う国際教育拠点」構想を具体化した取り組みであり、この構想を具体化するに当たって掲げた共通コンセプトの一つには「幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う」（本報告書７ページ）とあり、これは「多様性の尊重と寛容の態度の育成とともにコミュニケーション能力・言語力の育成」と読むことができます。

一方、世界に目を向けると、トランプ米大統領の国内第一主義、イギリスのＥＵ離脱、行き場がなくなった中東難民の問題など、ダイバーシティ共生社会とは違う方向へ向かっている出来事が話題になっています。

社会の経済状況の不安定化に伴って、諸物価や経費の値上がり、また国から大学への運営費交付金の減少などから、経費のかかる国際交流活動への取り組みも厳しい状況になりつつありますし、各附属学校の教科外活動で実施される国際交流活動にかける教員のエネルギーも相当なものがあります。

このような状況の中で、筑波大学附属学校群ならではの国際教育、グローバル人材育成の教育について改めて考える時期に来ているように思います。

（資料）附属学校の国際交流協定締結状況

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校	大韓民国 光州松源初等学校	2016.10.11	2016.10.11 ～ 2019.10.10	教員同士の授業技術の交流	言語の異なる児童や教師を対象にした授業、講演、ワークショップを通して、グローバル教育の視点を始め、相手にわかりやすい表現方法や教材開発、授業技術を研究する。	附属小学校と光州松源初等学校の両校の教員が授業技術を通しての交流を、既に８年間も継続。恒常的な交流をめざして締結した。
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒の相互交流の意義とその可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的として結ばれた協定のなかで、北京師範大学第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校及び附属駒場中・高等学校も付随して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結んだ際、附属高等学校も交流組織の一つとして参加した。
附属駒場中・高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	北京師範大学附属実験中学との中等教育分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学との交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11 ～ 2020.12.10	研究発表（主に理系分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校間の提携を促進し、生徒達の国際的な視野の拡大を促進することを目的とする。	本年４月、相手校から姉妹校協定締結の申し出あり、５月１日に本校校長他が訪問した際に詳細な打合せを行った。５月27日、相手校校長が来校し、詳細事項を詰めた。
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1 ～ 2020.11.30	国際教育（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが2008年に採択を受けた文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業に端を発する。その後トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けた活動や「アジア高校生聞き書きプログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育センター	2013.3.19	2013.3.19 ～2018.3.18	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や「アジア高校生聞き書きプログラム」等でのインドネシアでの活動の際に協力を得たことから交流が始まった。林業教育センター・インドネシア林業省・在日インドネシア大使館の強い要望を受け協定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第６高等学校	2015.9.1	2015.9.1 ～ 2020.8.31	国際協働学習、ＥＳＤ、ユネスコスクール間の国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理解及び国際的研究活動のため	2012年５月のインドネシアユネスコ国内委員会との交流を契機として、毎年本校と同委員会との交流を深めていった。2014年ユネスコスクール関係者他が来校し、パダン校から強い関心を示され、2015年本校教諭が訪問し準備を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン共和国 フィリピン大学附属ルーラル高等学校	2016.11.1	2016.11.1 ～ 2021.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）、短期・長期留学、国際インターンシップ	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年、筑波農学ESDシンポジウムの際に、附属学校フォーラムが実施され、教員間の交流が始まった。その後、高校生国際ESDシンポジウム、全国SGH校生徒成果発表会などで協働学習が進む。今後、生徒の相互留学、教員間の授業研究等で相互に利益が多いと考えられ、協定締結に至った。
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2015.12.1 ～ 2020.11.30	初等中等教育（特別支援教育）における生徒間交流	フランスと日本両国の友好と親善を促進するとともに、両国の聴覚障害教育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒とパリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通を開始した。 2002年、パリ聾学校長から姉妹提携の申し出があり、2003年９月、パリ聾学校にて、交流協定書を交わした。
	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2015.6.1 ～ 2018.5.31	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換	両校は、特別支援教育とりわけ聴覚障害教育に関わる教員交流・生徒交流・情報交換を通して、両国の文化について深く学び合うと共ともに聴覚障害教育関連の活動を推進し、両国並びに両校の発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他が美術教育におけるＩＣＴ教材の共同研究をすすめるために訪問、その後、本校中学部生徒とのE-mailでの交流活動を行うなど交流協定の基盤を築き締結に至った。

（2016 年 4 月～ 2017 年 3 月）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
協定締結によって安定した交流が実現できた。両国教員が海外で研修する機会と予算が担保でき、両国の教員が授業技術や指導法を通して恒常的に交流する場が確保できた。	公開授業、講演、ワークショップなどの活動を、互いの学校や周辺地域にて実施した。	現在は特になし	現在は特になし	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日体験入学及び文化交流		2009 年 10 年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007 年、2008 年に SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH 事業として北京を訪問	SSH 事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は 1 ヶ月程度～ 1 年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する 5 つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESD およびその後継事業である GAP 活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	・高校生国際 ESD シンポジウムにおいて、教員間の交流を図る。 ・日本およびインドネシアのユネスコスクール活動や ESD に関する情報交換、教材研究を行う。	・高校生の国際交流。ESD に関するシンポジウムや SGH 研究大会における課題研究の成果発表と共有。 ・交流人数：派遣 5 人／年（最大）、受入れ 5 人／年（最大）	世界のユネスコスクール間の国際連携モデルをなるように両校の交流を進めていく。	インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生としてフィリピンに渡航できる機会を与えられる。とくに英語学習に利点がある。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。 ・高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は 1 ヶ月程度～ 1 年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびフィリピンでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など） ・シンポジウムの共同開催		・フィリピン大学への高大接続も検討を行う
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立バリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属大塚特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学校	2009.12.29	2009.12.29～2014.12.28	知的障害教育の実践・研究（指導法・教育課程・教材教具等）	教員の交流、生徒の交流、共同研究・研究交流の推進、研究成果・研究資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教育が既に交流協定を締結しており、本学と同様の特別支援学校を有することから、学校間交流にまで協定を広げ、現場での教育実践・研究の国際教育協力を推進する必要があった。
附属桐が丘特別支援学校	大韓民国 セロム学校 （旧三育再活学校）	2010.2.3	2015.2.13～2018.2.12	・児童生徒間の学習活動の交流 ・肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換	・日韓両国の肢体不自由教育の充実と発展に寄与するため。 ・国際教育の視点の一つである日韓の相互理解と親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に挙げている“国際教育拠点事業”の一層の充実を図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長が双方で開催された研究会に出席し、それぞれ取組を発表。2008年度末、本校の代表生徒1名を含む訪問団を同校に派遣。2009年、校長ほか2名が同校を訪問し、国際交流協定締結に向けた事前調整を実施。同時にスカイプを使った交流授業を開始。2010年2月、再び同校の校長、研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、開催前日に国際交流協定を締結。
	中華民国（台湾） 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24～2021.11.23	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育学校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結の可否について打診。これを受け、同年11月に本校校長ほか3名が同校を視察し、国際交流協定の締結の可否について検討。2015年10月、同校校長を含む訪問団が来校し、その際に2016年の国際交流協定締結を約束するに至った。
	中華民国（台湾） 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25～2021.11.24	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する特殊教育学校である同校を視察。2015年11月、本校副校長ほか2名と代表生徒2名で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否について打診。その際、2016年の国際交流協定締結について内諾を得た。
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2011.8.29	2011.8.29～2016.8.28	・教員間の教育実践研究 ・児童生徒間の教育活動	・日中両国の自閉症児教育の充実と発展に寄与するため。 ・日中の相互理解と親善を図る。	平成21年5月、中国寧波市達敏学校校長が本校を訪問し教育実践を視察の結果、本校への教員派遣・研修の実施の希望があり、これまでに3回にわたって教員研修の受け入れを実施。平成23年度、達敏学校が全中国の特別支援学校の研究指定校となり、国際的な研究会議や研究発表等の実施を予定しているため、それに向けて本校との姉妹校協定締結について申し出があり、平成23年8月29日に協定書を交わした。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28～2019.9.27	・教員間の教育実践研究	・日中間の文化交流を深め、両国の特別支援教育領域の促進を図るため。	2014年1月、副校長と小学部主事および幼稚部教諭の3名で中国江蘇省蘇州工業園区仁愛学校の求めに応じ視察を行った。その後両校から立命館大学に留学受け意見のある教員が本校の実践研究協議会に参加した。同校の校長や教員から、本校への教員派遣・研修の実施の要望があり、2014年9月の2度目の視察の際に日中自閉児教育研究会を同行にて実施するともに、本校との姉妹校協定締結を行った。

締結・更新の記録

年　　度	学　校　名	新規／更新	相手校・機関
平成21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中・高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成22（2010）年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中・高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が５校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他４校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールや HP などを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭がおり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系 DC 修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010 年、高等部３年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012 年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また今年度の達敏学校を会場として行われる研究会にも協力する予定。	平成 24 年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育的支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015 年は、本校の公開授業の動画データなどを私用し、skyp によるケースカンファレンスや授業研究会を行う予定である。	本校のきらきらコンサートなどの催しを skyp にて配信し、児童館での交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

平成 24（2012）年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立パダン第６高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源初等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（中華民国（台湾））
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（中華民国（台湾））

（資料）報告書発行の記録

第１集（2007 ～ 2008 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009 年２月発行
第２集（2009 ～ 2010 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011 年７月発行
第３集（2011 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012 年３月発行
第４集（2012 年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013 年３月発行
第５集（2013 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014 年３月発行
第６集（2014 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015 年３月発行
第７集（2015 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016 年３月発行
第８集（2016 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017 年３月発行

平成 28 年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	澤田　晋	附属学校教育局教授、附属視覚特別支援学校長
副委員長	今井　二郎	附属学校教育局教諭、教育長特命補佐
副委員長	小林　美智子	附属学校教育局教諭　教育長特命補佐
	宮本　信也	筑波大学副学長・附属学校教育局教育長
	松本　末男	附属学校教育局次長
	下山　直人	附属学校教育局教授、附属久里浜特別支援学校長
	飯田　順子	附属学校教育局准教授
	木村　範子	附属学校教育局講師
	気仙　有実子	特別支援教育研究センター教諭
	鷲見　辰美	附属小学校
	久保野　りえ	附属中学校
	曽根　典夫	附属高等学校
	山田　忠弘	附属駒場中・高等学校
	建元　喜寿	附属坂戸高等学校
	黒岩　聡	附属視覚特別支援学校
	山本　晃	附属聴覚特別支援学校
	佐藤　義竹	附属大塚特別支援学校
	松田　幸裕	附属桐が丘特別支援学校
	沼澤　聡子	附属久里浜特別支援学校

MEMO